
不思議な人。

薄桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不思議な人。

【NZコード】

N9988X

【作者名】

薄桜

【あらすじ】

マンションの下に突っ立っていた背の高い男。 一体何をしてるんだろう?

そんなよく分からぬ人物に興味を持つて、観察をして、でもやっぱり分からぬから、直接声をかけてみる。

きっかけは好奇心。

すべてはそこから始まった。

世の中には色々な人がいる（前書き）

私の書いた、同タイトルのお話に心当たりのある方へ、
すみませんリメイクです（^ ^ ;

アルファポリスの「青春小説大賞」に安易な気持ちで、既存作品で
エントリーしよう！
と、思い見直してみたのですが…
あまりにも稚拙で恥ずかしくて、せつくり書き直しに走ってしまいました。

別物になると他に響くので、軌道を外れないように心がけてますーー。
それと、今以前のは引っ込めます。

世の中には色々な人がいる

おーっ、良く撮れてる。現像したばかりの写真を作業台に並べ、その出来に私は笑みを浮かべる。これはなかなか……これはまた良い小遣い稼ぎが出来そうだ。

その時不意に、ワーグナーのワルキューレの騎行の序曲が鳴り出した。堂々として、踏ん反り返りたくなるような曲、私はこの曲が大好きなのだ。

ワルキューレ＝北欧神話の戦の女神は、戦死者の中からヴァルハラへと受け入れる勇士を選定する役目を持つらしいが、私の抱いているイメージとしては勝利に導く女神だ。輝く鎧に身を包み、天馬に乗つて戦場を駆け抜ける。その姿に兵士達は奮い立ち、勝利を求めて勇猛に突き進む。もちろん戦争は嫌い。でも、まるで何かに立ち向かうためにあるような、この堂々とした曲はたまらなく好きだ。つて、聞き入つてる場合じゃないな。

作業台の上に置いてあるラズベリーピンクとかいう色の携帯が、曲に合わせて明滅し着信を訴えている。もちろんこの携帯の持ち主は私。

携帯を開くと『母』と表示されているが……さて、何の頼まれ事だろう？ 通話ボタンを押して右耳に当てるといきなり雜音が聞こえてきた。どうやら今は外らしい。

「何？」

「あー美晴？」
みはる

「今家にいる？」

「いるけど？」

「あのね、母さんの机にある写真持つて来てくれない？ 封筒に入ってるんだけど。」

「ああ、ちょっと待つて。」

携帯を耳に当てたまま母の部屋に向かう。私の母はカメラマンをやつていていつも忙しそうだ。出版社と契約し、結婚式場にも出入

りし、おまけに写真集まで出した事がある。女やもめは大変なのだろう。が、いつも楽しそうに仕事をしているので、悲壮感なんてものは感じない。母がどう思っているのか本当の所は分からなければ、母と娘一人、女ばかりで結構仲良くやっているつもりだ。

「部屋に来たんだけど、写真の入った封筒……つていっぱいあるんだけど、どれ？」

机の上と言わず、棚や床に置かれたダンボールにも同じような封筒が積み重なっていて、どれが必要な封筒なんだか私にはさっぱり分からぬ。

「上原様って書いてあるから。」

肩で携帯を支えてその文字を両手で探す。とりあえず手近な位置を上からどかしてみると、3番目に『上原様』と母の字で書かれたものを見つけた。やつた、簡単に見つかってラッキーだ。

「上に原っぱの原ね？ あつたあつた。」

「じめんねー、今日急に取りに来るつて言われちやつて、いつもの喫茶店にいるから、じゃあよろしく~」

よろしく~って、近いじゃないか。取りに帰ればいいのに。と思わなくも無いが、そこは昔から母のお気に入りの場所で、気分転換の場所でもあるらしい。

『Le sucrier』フランス語でシュガーポットという名の、シックな色使いの落ち着いたあの店は、コーヒーが絶品だとう。年配のマスターが一人でやっていて、行くといつもジャズが流れている。長年の常連客の憩いの場といった感じだ。かくいう私も親に付いて幼い頃から通い詰めている常連の一人なのだが、でもまだあの店のコーヒーは飲んだ事が無いので、相変わらずコーヒーの評判は伝聞でしかない。

「はいはい、了解。」

通話を終えて部屋に戻ると、チャコールグレーのお気に入りのコートを羽織った。携帯と小銭の入った財布、デジカメをポケットに突っ込み、届ける写真の入った封筒を持って、ブーツを履く。よし

つ、これで準備完了。つと、その前に。

「和歌奈、ちょっと母さんに届け物してくるから、後よろしく。」

出口脇のドア、私の部屋の反対側になる妹の部屋に向かつて一言かけた。返事はおざなりな「んー」とだけだった。

> i 3 3 7 3 6 — 4 2 0 4 <

母さんに驚つてもらおうと、意気揚々とエレベーターで1階に下りてきたものの、障害物を見つけて一気にテンションが下がった。マンション出入口のど真ん中に立ち止まって、道を塞いでる迷惑な男がいる。おそらく180cmを超えていると思われる長身。そんなどかいやつが行く手を阻んでくれると、邪魔以外の何物でもない。

突っ立つて何をしているのかと、少し観察してみたが動く様子はない。しいて言えばガラスの向こうの外を眺めている。そのくらいしか私には思いつかない。けれど外にある物といえば、まあサザンカがキレイに咲いていが、他の木は冬を前に葉を散らしほぼ裸の状態だ。ぎりぎり向こうの花の無い常緑樹が見えるかな？ 花壇に植えてあつた花も、少し前に抜かれてしまい今は土しかない。何をそんなに見るべきものがあるのだろう？

こうやって観察していても時間が過ぎていくだけで、ようとしてその意図は読めない。いくら好奇心の僕しもべである私でも、さすがに時間の無駄かと思い始め、彼の探求は断念する事にした。いきなり『何をしてるの？』と声をかけてみるのも悪くないが、もしも彼が不審人物だった場合、面倒な事になるかもしれない。そして万が一長引くと、母に迷惑をかける事になる。それだけは絶対にしたくない。普通に歩いて近付いてもまったく気付いてくれない。どれだけ集中してるんだこいつは？ 封筒を胸に抱えてゆっくり息を吸い込んだ。そして一気に勢いで声を出す。さすがにここまでやればこいつも気付くだろう。

「すみません、通れないので退いて下さい！」

すると男は少し肩を揺らした。驚いてくれただろうか？　だとしたら嬉しい。『やつた！』って気分だ。それから彼はゆっくり振り返ると私を見下ろす。……でかいな本当に。

年の頃は二十歳前後くらいだろうか？　私よりは間違いなく上だ。染めていない髪は適度な長さで悪くない。ただ無精ひげは残念に思う。無ければ結構良い男なのかもしれないのにな。

彼は無表情の無口で見下ろしたまま、何故か動こうとはしない。人がわざわざ退いてくれって言つてゐるのに、退かないのは何故だ？　「えーと、聞こえますか？　邪魔なんで退いて下さい。」

もう一度言いつと、ようやく彼は右側に三歩下がり場所を空けてくれた。最初の言葉は聞いてなかつたのか？　いやでも驚いて振り向いたよな……まったく妙なやつだ。

私はどうもと声を掛けて通り過ぎ、そのまま外に出た。その間男は一言も発しない。ドアが閉まつてから振り返つて窺うと、今度は道を塞がない位置に移動し、また外をじっと見てゐる。十一月も半ばに差し掛かり、気温もぐつと下がってきたというのに、厚手とはいえ白っぽい長袖シャツに下はジーンズといつ姿では、見ている二つの方が寒い。

そんな事を考えていると、うつかり彼と目が合つた。じつと見過ぎてしまつたようだ。少し気まずい気分になつた私は慌てて目を逸らし、急いでその場から逃げ出した。

指定の喫茶店の扉を開けると、上部に付いてるベルがカラランと良い音を響かせる。少し低めの音は店の雰囲気に相応しい。この聞き慣れた音は、色々な記憶と結びついていて大好きだ。

「こんにちは。」

「いらっしゃい。」

しかし、同時にかけられた声に覚えは無く、一瞬『?』が頭を占

めた。声の主はかなり見た目の良い茶髪の青年で、トレイを右手に掴んだままカウンターにもたれ掛かっている。アルバイトでも雇つたんだろうか？ 年は二十台半ば辺りで正解だろう。第一印象としては軽そう？ いやあの笑顔は底が見えないタイプという可能性もあるな。「うん、その方が面白やつなので、そっちを採用しておく事にしよう。」

私が無駄に勝手にそんな事を考えていると、カウンターの向こうのマスターが、いつもの笑顔で迎えてくれた。

「美晴ちゃんいらっしゃい。」

うん、これこれ。やっぱりこれが無いと、この店に来た気がしない。

「ほんにちは、マスター。」

「いらっしゃい、早かつたわね。」

マスターの正面の、カウンターのいつもの席で母が手招く。自分としては、思わぬ事でしつかり油を売ってきたような気もするのだが、『早い』と思われているのなら否定はしない。

今迄、母とマスターと新顔の青年とで喋っていたのだろう。母達の配置はそうとしか取れない。今他に客がいないからいいものの……って、いや、客が居ないって事の方が問題のような気もする。とにかく近くに寄つて封筒を渡す。

「近いじゃん。」

そう一言付け加えるのが重要だ。多少恩着せがましく言つてみれば、恩を売つたような気分になれる。そしてその恩はすぐに効果を表してくれる。まあこれは、母さんくらいにしか使わないけど。

「まあいいじゃない、ありがと。何か飲む？」

「ミルクセーキ。」

私はメニューも見ずに即答する。

「聞くまでも無かつたわね。」

母はそう言つて笑つた。

「何となく……ね。ここは、これじゃないと嫌なんだ。」

父も一緒に来てた頃から変わらない。きっと変えたくないのかかもしれない。父はもういなくなってしまったけれど、だからこそ、ここはこれじゃなきやつて思う。

「はい、お待たせ。」

私が『一』を脱ぐ間も無く、ましてや座りもしてないうちから、マスターがカウンターに私専用のカップを置いた。線の細いカップじゃなくて、子供が持つても大丈夫そなぞつしりと安定感のあるピンクのマグカップ。いつから使つていいのか記憶に無いけど、ずっとこれが私の前に出てくるのだ。

「早つ、お待たせつて、私待つてないよ?」

「美晴ちゃんが来るつて言うから、先に準備して待つてたんだよ。そう悪戯っぽい事を笑顔で言つてくれると、とても嬉しい。けど口はそんな風には動かないのが私つてものだ。

「うつ、やつぱり何か敵わないな。」

「聞いてた通りの子だね。」

すると、急に例の知らない青年がやたらと盛大に笑つてくれた。今迄ずっと私を観察でもしていたのだろう。これまでに私の話題がここに上つた事は想像に難くないが、聞いてた通りつていう部分は何となく面白くない。

「はい?」

多少険しい気分でいると、母がカップを持ったまま彼の紹介に割つて入つた。

「あのね、この人はマスターのお孫さんの北川文紘くん。大学を出て、そのまま『ここで働く』つて、押しかけてきたんですつて。」

「いやあ、就職失敗しちやつて……。」

彼はやはり笑顔で、人事のように爽やかに笑つているが……それで良いのか?

それは彼の人生で、どうせ私には直接関係など無いが、やはりこの笑顔は裏を見せない類のものかもしれない。何となくそう思った。うん、どっちでもいいんだけどさ。

日常に入り込む好奇心とその理由

学校からの帰り道、友人の安田葵やすだあおいと、よーくある他愛の無い話をしながら住宅街を歩いていた。6時限まであったものの、一人ともクラブには所属していないので、時間は早くまだ明るい。

「この間さ、聰太そうたが女の子と一緒にいたの見かけたんだけど……彼女出来たのかな？」

そう、他愛の無い話とは恋愛話。出来過ぎなほどキレイな顔を覇らす葵の、無自覚な恋愛相談……というか、とにかく普段から聰太くんの話ばかり聞かされている。

聰太くんというのは、フルネームを為井聰太ためいそうたという。葵の一つ下の弟と同級生で親友だ。まだ中三ながら見た目は抜群、成績も優秀。そんな所に弱い女子からは絶大の人気を誇り、私の商売は大繁盛。けど、少々気が弱くて運動は苦手なんだけどね。

一方、葵の弟の航わたるはその反対で、勉強は得意じゃないけどよく動く。見た目はまあ、そりや葵の弟だもんって感じ。でも弟の方が少し人懐っこい印象がある。けど二人が並ぶと、どうしても聰太くんの方が目立つちゃうから、何となく損をしてる感はあるかもしれない。

あの二人は性格が随分違うけど……でもだからかな？ ちっちゃい頃から仲が良かつた。よつて、葵と聰太くんも小さい頃からの幼馴染だ。

ただ問題なのは、この二人どうからどう見たって両思いだつてのに、何故か本人達には分からいらしい。どっちもウジウジして全然動かないから、『早く付き合つてしまえっ！』……と、周りは皆ヤキモキしてるつてのが裏側の話。

ああ、そういうれば思い当たる事があった。今回の件はあれだなと

携帯を開き『理佐ちゃん』といつフォルダに仕分けられた一件のメールを表示する。そしてその一部分を読み上げた。

「名前は石川朋花同じクラスで、一学期のはじめに転校してきた子

……ひしょ?」

葵が呆れた顔をして私を見ている。

「いつもながら詳しいわね。」

「黙つても、情報の方からやつてくるのさ。」

そう、別にこの理佐ちゃんという情報提供者に、私から頼んで送つてもうつたものではない。兄思いの妹からの善意の報告。彼にとっては可哀相としか言い様が無いけれど、情報ソースは完璧だ。実はこの二人の仲に一番ヤキモキしているのが理佐ちゃんで、さっさとくつづけてくれって私はお願いされている。双方と付き合いつがあるし、自他共に認めるお節介な性格でもあるからなのだけれど。でもなー、私にはその気は無いんだよね。

そりや、見ててイライラする気持ちは分かる。だけどこいつの人は他人が出る幕じゃないって思つてるから、様子を見ようよつて宥めてるんだけど……やつぱりこつして逐一色々と情報が送られてくるから困つたもんだ。

「そつか、立派な諜報員がいるもんね。」

今の台詞を、葵がどんな顔をして言つたのか実は知らない。声の調子からすると呆れているのは確実だろうけど、私は別の人物を見ていた。

「とにかくその子は彼女じゃないよ。今の狙いは聰太くんじゃなくて、葵の弟なんだってさ。」

口はメールにあつた続きを要約して答えたが、目は脇の公園の一点を捉えて離せなかつた。この間マンションの一階にいた不審人物。あの彼を見つけたのだ。あの邪魔だった男、何をしてるのかさっぱり解らない男、寒くないのか不思議でしょうがなかつた男。

「……本当に詳しい事で、つて航！？」

通学路にしている住宅街の中にある第一公園。鉄棒の向こうにあ
る半分埋まつたタイヤに座り、じつと石碑に向かつてゐる。「ひら
からは背中くらゝしか見えないが、やつぱり今日も何をしてゐるの
かは分からぬ。」

あの石碑は地元出身の画家を称えたもので、亡くなつてから建て
られたと聞いた事がある。その画家について詳しい事は知らないけ
ど、明治の生まれの日本画家であるらしい。大きな岩を割り、磨い
た面に一本の木と一遍の言葉、そして花押が刻み込まれてゐる。

「美晴？」

石碑で無ければ、あの上に留まつてゐる数羽の小さな鳥だらうか
？あの方向にある物はそのぐらゝいのもので、まさか隣りの家の壁
や屋根つて事は無いだろ？

「みーはーるー？」

気になる……彼は一体何をしているんだ？

「あの人ならこの間も見かけたよ。美晴そんなに気になるの？」

「つー？……びっくりした。」

完全に彼に気を取られていた私は、急に葵に抱きつかれ相当驚いた。

「だつて、立ち止まつちゃうし、呼んでも気付かないんだもの。」

意識が完全に件の人物に行つていて私は、不覚にも自分が立ち止
まつてゐる事にすらまったく気付いていなかつた。

「ねえ、何でそんなにあの人見てたの？」

すぐ傍にある腹の立つほどキレイな顔を見ると、とても楽しそう
で空恐ろしい。けれど、そう言われて私は初めて理由を考えた。本
当に何故なのだろう？

「うーん、そうだな……気になるから？ うん、妙なやつで何かす
ゞく気になる。」

自分でも漠然とし過ぎて良く分からなければ、彼のやつている
事がさっぱり理解出来ないって言うのが、とても気になる……とい

う部分は確実だ。そしてその理由はとても自分で気に入ってしまった。

「うわ、美晴の好奇心出た。」

「うん、そうそう、私のセンサーに引っかかる感じ?」「

「その不適な笑み、ちょっと怖いよ?」

勝手な事を言って離れて行くが、さつきの葵の顔だつて何かやらかしそうで十分怖かつたさ。彼女がやたらとキレイに笑った後は、大抵碌な事がない。それが私に向けられたものでさえなければ面白いけど、こちらに向けば面倒なになりかねない。

「失礼な、放つといて。」

この間も彼はまったく動かない。本当に何をしてるんだか……あもう気になる。でも、今動くのはきっと得策じゃない。さつきのあの葵の顔を見てしまうと、何か弱味でも握られそうな気がして動くに動けない。自分にとつてのプラスとマイナスを色々計算した結果、後ろ髪を引かれる思いで私は彼から田を離した。

また縁があれば会うだろう。とりあえずそう納得した事にして、葵を置いてさつさと一人で歩き出した。葵の無用な冷やかしと不満は、今は聞かない！

彼の見ている世界はどんなものだらう

それから一週間。彼と私は相当縁があるようで、毎日のようじやでひづりの姿を見かけた。

いつも彼は何かをじっと見ている。神社の下の池や、河川敷の岩、公園の木に、港の側で海を眺めている事もあった。やっぱりよく分からぬけど、ずっと共通する何かを見てるんだろうか？ それとも毎回違うのかな？ 何のために見てるんだろう？ そして何を考えているんだろう？ とにかく私は、それ以外の姿をまだ見ていない。

その姿を見かける度に、気になつて気になつて、最後にはイララする。彼も私も暇人だと正直思う。けど、そのくせ一方では探し物をするゲームみたいで面白いと思う自分もいる。おかげで最近は、どこに行つても彼がいないかと田で探す癖がついてしまった。

でも、もちろん見ているだけでは、私の好奇心が満たされるはずも無い。

見ているだけでは理由は分からない。

だからその理由を訊くために、そして自分自身の精神の安定のため、思い切つて彼に声を掛けてみる事にした。

今日の彼は、うちのマンションから程近い川土手でじっと空を眺めていた。

ここは登下校時にいつも通る道で、脇には等間隔で桜が植えている。春には見事な花が咲き誇る道。しかし今のここは、残念ながらただの立ち木が並ぶ川土手でしかない。おまけに灰色の曇り空に、赤く染まる葉が少しばかり残る程度の木々という組み合わせは、どこかもの悲しさすら感じる。

しかし彼は、そんな木の一本に寄りかかって、どんよりした空に

険しい顔を向けている。本当に何をしてるんだ？ 私は彼の側で止まる、意を決して声を掛けた。

「ねえ、何見てんの？」

しかし彼はこちらを一瞥したものの、何も言わず視線を再び空に戻す。どうやら無視するつもりらしい。そりや誰とも知れぬ人物に、いきなりそんな事を言わされたら嫌かも知れない。けど、何も返してくれないってのは酷くないか？

謎の人物つてのは面白そうだけど、実は正直苦手もある。しかも向こうはいつも機嫌が悪そうで、はっきり言って近寄り難い。私は普段ヘラヘラするように勤めてるけど、内心はそうでもないんだ。「無視しないで教えて。この間から、ずっと何やってんのか気になつて気になつてしようがないの。」

寒いはずなのに握った手のひらには汗がにじむ。私だつて結構な決意で声を掛けたんだぞ？ そりや私が勝手にやつてる事だけど……でも、ここで諦めたら私はずっと答えが得られない。そしたらずっと分からなくて、このイライラも治まらない。それは絶対に嫌だ。「だから、何やってんのか教えてよ。」

私はじつと彼を見た。空は見てるだけでなかなか樂しいってのに、いつもいつも不機嫌全開みたいな顔してるのは何故だろう？ 雲はずっと変化し続けて一度も同じ時は無い。ずっと空見てるくせに何であんな顔しか出来ないんだろう？ それにしても、やっぱり無精ひげはいただけないな。剃ればいいのについて本当に思う。

やがて彼は根負けでもしたか、諦めたようにこちらを見て溜息を吐いた。ようやく話してくれる気になつたか？ と、そう内心でほくそ笑んだものの、喜ぶのはまだ早かった。

「空。」

彼の答えは、期待外れも甚だしい。

「空なのは見れば分かる。そんなにじーっと見て、何が見たいの？ 何考えてんの？」

年下だと思って、いや、女だと思ってバカにされてるんだろうか？ それとも実は空の観察するのが仕事だとか？ や、そんな事はないだろう。彼が見てるものは、私が知る限り空だけではない。

きっと今は私は彼を睨み付けているんだと思う。こうこう扱いを受けるのは、もちろん好きじゃない。場合によつては笑顔を押し通す事だつて出来るけど、今は何となくしたくなかった。すると彼はもう一度溜息を吐き、またよく分からない事を言つてくれた。

「……目に見えるものと、目に見えないもの。」

「はい？ それは禅問答か何かなのか？」

そうか分かつた。そつちがやる気なら私はとことん付き合つてやる。物好きだと自負する私のやる気は、俄然湧いた。闘志という言葉に置き換えたつて間違いない。

「目に見えないものって何？」

私は彼を真つ直ぐ見据えて問いかける。

「さあ？ まだ見えないから分からない。」

しかし彼は、こちらを見ようともしてくれない。

「どれだけ見れば、見えるようになるの？」

「さあ、どのくらいだろうな？ 僕も知りたい。」

そう言つた彼は薄く笑つた。自嘲だろうか？ それとも少しこちらに興味を示してくれたのだろうか？ ならば、と、私は質問の種類を変えてみた。

「そんな格好で寒くないの？」

急に話題が変わつて空回りしたのか、片方の膝が抜け少し体がずり落ちた。よしよし、乗つてきてたんじやないか。ようやく私のペースに載せた確信が持て、今度こそ内心でほくそ笑む。

「寒い。冬は寒いのが当たり前だ。」

体勢を立て直して不機嫌な声を出す彼の格好は、黒いシャツの上に茶系のチェックのネルシャツだけだ。先日よりはマシではあるものの、まだ見てる方が寒い。まったく、寒いからこそ、暖かい格好をするものだろう？ だから私はコートを着て、マフラーを巻いて、

おまけに手はポケットの中だ。

だけど、これで私は完全に興味が湧いた。まつたく面白いやつだと頬が緩むのを隠せない。訳が分かんなくって最高に面白い。まるで新しい玩具を手に入れた子供みたいにワクワクする。

今の彼は目に見えて不機嫌だけど、バツが悪くて拗ねてるだけだ。話しかける前の印象とは随分違つて、何だかとても嬉しかった。

彼が見上げている空を、私も同じように見上げてみる。一面に雲が広がり、太陽はその向こうで薄い光の輪郭を見せてているだけだ。

彼の言う『目に見えないもの』とは何だろう？ もし、この雲が晴れて青い空が見えれば、せめて雲の切れ目からその青が覗けば、彼の言うその何かが見えるのだろうか？

彼の目は依然空に向けられたまま、何も話す気なんか無いとばかりのバリアを感じる。それ所か、私の存在を無いものだとでも考へているかもしねれない……。

でもそんなのは許さない。許せる訳がない！ 私は彼に興味を持つたんだ。
「私は大垣美晴。おおがきみはる覚えといて。」

大きく息を吸つて一方的に名を名乗る。そしてそのまま家に向かつて走つた。返事なんか期待してないから、どんな反応だったかなんて知らない。それにどうせ返事なんか待つだけ無駄だろう。

でも今に見ても、絶対にそのバリアを破つてやるから！

けど今は家に帰れば色々とやる事が待つていて。ここで油を売つた分、夕飯の支度を急がなきゃいけない。

彼と違つて、私はとっても忙しいんだ！！

笑ったのは店へと向かう橋の上

さて、今日のタイムセールはタマゴと豆腐、火曜だから朝分の魚も買って、牛乳も少なかつたから……と、買い物リストを頭に刻みつけながら、夕方の道を自転車でスーパーに向かっている途中、久しぶりに彼を見つけてブレーキをかけた。

一方的に名乗つて以降、しばらくの間どこに行つても彼の姿を見かける事が無かつた。別に待ち合わせしてる訳じやないから、ただタイミングが合わなかつただけだらう……とは思つていたけど、どこか物足りないような気がしていいたのは間違いない。

十一月に入り空気はまた一段と冷えた。それなのに……彼は寒さに強いのか？

殊更寒い風の吹き抜ける橋の上の反対側で、じつと川を眺めている。西の空は朱から薄紫へと染まりつつあり、あの美しさには心が躍るつていうのに、どうして今日は川なんだ？

でも、今日はさすがに薄着じやなくてグレーのコート。おまけに首には紺色のマフラーも見えて安心した。もし今日も薄着だつたら、今背中に貼つてるカイロを無理矢理にでも渡してしまつただろう。寒がりの私には、今はそれくらいしか押しつけられる物がない。

しかし、手をポケット突っ込んで、一体何を見ているんだか……。街灯の光を映す川面が、水の流れに身を任せる草が、泳ぐ魚は……見るにはもう少し暗いか。

一人で色々考えてみたつて、やつぱり何だか分からない。セールの時間が気にはなるものの、結局私は好奇心には逆らえないんだよね。

彼とセールを一瞬だけ秤にかけて、あつさり自転車を反転させた。考えるまでもない。久しぶりに見つけたんだ、ここで逃してたまるね。

もんか。

身の切れそうな冷たい風に負けず、全力でペダルを漕いで橋の手前の横断歩道に向かう。冷え過ぎで痛む耳は、もう少しで頭痛にランクアップしそうだ。惜しくも間に合わなかつた信号を待つて、反対側に急いで渡る。そして速度を緩め、彼の側で自転車を止めた。

「久しぶり。ねえ、名前は何ていうの？」

自転車に跨つたままいきなり声を掛けると、彼はこちらを田で確認して溜息をこぼした。またかという態度は少々面白く無いものの、覚えてくれて良かつたと思う。

彼は川面を眺めたまま、諦めたように口を開いた。

「しき。」

そして私は呆然とする。こんな突然で強引な質問に、あっさり答えが返つてきて拍子抜けしてしまつた。もう少し、こう……一人で一方的にウダウダと突付き回す事を想定してのジャブだつたのに、こうもすんなり答えてくれると後の予定が完全に狂う。けど、『しき』って何？

「しき？ それはどこの部分？ 名字？ 名前？」

訊いといて何だけど、『しき』って名前はあるのかな？ いや、でも実は日本人の人じやなかつたら、そんな名前もあるかもしれない。こつちは既にフルネームで名乗つているし、どうせなら両方聞き出したい。別に悪用しようとかつて訳じや無くて、彼だやつだと不確かなのばつかじやなくて、きちんと呼び名を決めておきたい。

「自称。」

「はい？ 自称つて何？ 本名は？？？」

じ、自称つて、どちらでも無いつてどういつ事だ？ 私は適当にあしらわれただけなのだろうか？

「俺には不釣合いらしいから、使ってない。」

いや、別にあしらわれた訳では無いらしい。彼は目を閉じ溜息混じり。相当漫りこんでる感じか？ けど自分の名前が嫌い……とか

いつのでも無むをもつた。不釣合いとはどういう事だろ？私の印象としては、立派過ぎる名前を付けられていたとしても、それに負けるような外見だとは思わない。うん、ひげは相変わらず邪魔だと思うけど。

「じゃあ逆？ 珍名で気に入らない？ いや、それだと『不釣合い』という表現にはならないか。」

「うーん、もし苗字を拒否するのであれば、家？ ……そうだな。家族と何か問題があるという事かもしないか……けど名前も、ってのは何だろう？」

「…………じゃあ、『しき』ってどんな字？」

「歴史の『史』に、『稀』」

「どうした？ 面倒そうな顔してゐるくせに、これも素直に答えてくれるじゃないか？」

「うーん、『史稀』か。ペンネーム、ハンドルネーム……そのくらいの雰囲気だよな。」

「その意味は？」

「そう尋ねると、彼…………いや、史稀は驚いた顔をして私を見た。よしよし、やつと私を見る気になつたな？ ほんの少しでも彼のバリアに穴を開けたような気がして、私は内心ガツッポーズだ。そしてたぶん顔は笑つてゐる。寒くて表情筋おかしいけど、この内心の喜びは隠せていないはずだ。」

史稀はしばらく躊躇して、それでも律儀に話してくれた。非常に素直な性格の人間だつたらしい。

「…………長い歴史の中で、変わつたやつが居てもいいだらつて。」

「ともバツが悪そうな彼に、私がまず思ったのは。聞かれて恥ずかしいなら、そんな名前を名乗るな！ そして、名乗るんなら自身を持って！ だ。中途半端が一番悪い。」

とりあえず、その意味から受けた印象としては、彼は彼を取り巻く環境の中では異端な存在である？ とか、そんな所だろうか？

「…………笑うな。」

意外と単純なネーミングセンスに、思わず笑ってしまった私にすかさず苦情が申し立てられる。

「悪い、つい。」

「つい何だ？」

大分薄暗くなつて、はつきりとは見えないが、以前のような無表情ではないらしい。もし今が明るければ、赤い顔が見られたかも知れない。そう思うと非常に残念だ。

「いや、単純だなつて。」

「うるさい、余計なお世話だ。」

「うん、私お節介だもん。でもさ、名乗るなら堂々とすれば？」

「……変なやつだな、お前。」

その声はやや笑いを帯びて、また少し穴を広げた気がして心が躍る。

「うん、よく言われる。でも一つだけ訂正しどぐ。お前じゃなくて『美晴』。私には大垣美晴っていう名前があるの。」

たぶん名前を覚えてくれてはいないだろうから、念を押すように一度も名乗つた。この前は、印象さえ残せればそれで良かつたから、どっちでも良かつたんだけど、今度はさすがに覚えて欲しい。

「そういうば、前にもそう言つてたな？」

「ほーら、やつぱり覚えて無い。」

「仕方ないなあ。み、は、る。だからね？　今度は覚えといでよ。」

「さて、どうだらうな？」

「それと。……史稀も十分変なやつだから。」

私の中での史稀はこれで確定している。人の事は言えないんだぞ？　それにしても、彼の言葉の雰囲気が急に柔らかくなつたような気がする。

「お互い様かよ。……。」

ほら、軽口が出た。だとしたら嬉しい。

「そうなんじゃない？」

私があつたりそう答えると、彼は驚いた事に笑い出した。冷笑と

か苦笑とか、ましてや微笑なんてものじゃなくて、失笑……だよね、これ。

とにかく、何でそこまで？？？ つてほど笑ってくれた。

ひょっとして私は、バリアに穴どころか、中にまで進入する事が出来たのだろうか？ ずっと不機嫌だった彼は、もつと取つ付き難いと思つてたのに、予想よりも遙かに親しみ易いタイプなのかもしれない。

『予想外』

私はその言葉を、彼の印象に付け加えておいた。

1パックのタマゴの縁

『間に合えっ！』 そう願いながらペダルを踏む足に力を込め、スピードを上げる。充実感と引き換えになつた時間については、家計にとって実は大きい。

スーパーの駐輪スペースに滑り込むと、急いで施錠し売り場に走る。入り口でカゴを掴み、出来る限りの早歩きで売り場に向かう。豆腐は余裕！ 冷蔵の棚から2つ取つて、その奥にあるタマゴ売り場に急ぐ。

……けどアウト。残念ながら間に合わなかつた。あと少しという所で、最後の一つを目の前で持つていかれた。

1パック88円。同じ数で違うパッケージのタマゴなら、隣りに大量に積まれてるけど198円なんて書かれてるから、手を出すのに抵抗がある。でもなー、タマゴが無いと色々困るんだよな。

「あれ？ 美晴ちゃん……だつたよね？」

タマゴの前で、買う買わないをグルグル悩んでいる所に名を呼ばれ、呼んだであろう人物に視線をスライドさせた。あー、覚えてはいる。

「えーと、マスターのお孫さん？」

ごめん。覚えてはいるけど、名前までは覚えて無かつた。さすがに年上の人間にこの呼び方は無いなって思うけど、失礼ながらこれしか出て来なかつた。

「私も史稀の事を言えた義理じゃないな。
北川文紘です、文紘って呼んでね。」

彼も気に入らなかつたのか、微妙な表情で訂正する。まあ当然か。「ははは……文紘さんすみません、今度はちゃんと覚えときます。」「いや、責める訳じゃないんだけどさ。それより、何でタマゴの前で百面相してんの？」

は？ 百面相？？？

「そんな事してませんって！！」

タマゴを買うか買わないか悩んでいる姿はそんな風に見えたのか
？ だつたらそれは相当恥ずかしい。

「んー、じゃあひょっとしてこれかな？ もつ無いみたいだもんね。

「 彼はカゴからタマゴのパックを取り出して見せた。もちろんそれはタイムセールの品で、私は思わず凝視してしまった。人様の取り分を狙おうとか意地汚い事を考えてた訳じゃなくて、こんな人もタイムセールで買つんだなど、外見とのイメージのギャップに驚いただけだ。

「 ……ええ、そつなんですけど、ちよつと來るのが遅かつたみたいで。」

「じゃあ、どうれ。」

そして差し出された88円のタマゴ。非常に魅力的ではあるものの、微笑む彼に私は困惑した。だからね、人様の取り分を狙おうだなんて事は考えて無いんだつてば！

「何でですか？」

「ん？ 遠慮しなくていいよ。でもその変わり、またお店に来てね。

「営業ですか！？」

「そういう事。」

ギブアンドテイク。なるほど……。

「そういう事なら遠慮なく頂きます。」

渡されたタマゴを割れないようにそつと受け取ると彼はまた笑つた。

この人はこの顔で色々得をしてそうだ。葵や聰太くんもキレイな顔してるけど、不器用で色々ある。でも彼は、顔の作りだけでなく愛嬌まで兼ね備えてて、たぶん世渡りが上手なんだろうな。と、何となく思った。私もそんなに器用な人間じゃ無いから、少しだけ羨

ましい。

「じいちゃんはさ、あの店もう趣味でやつてるからそんなに稼ぎ無いんだよ。だから、もっとお客さん増えてくれないと、俺の給料分捻出できないんだよね。」

タマゴ売り場から、牛乳目指してゆるゆると移動しながらそのまま一人で話す。そんな気はしてたけど、やっぱリマスター 趣味だつたのか？ 常連さん達の憩いの場ではあるものの、その分新規のお客はあまりいない。ずっと入り浸ってる訳じゃないから、半分以上イメージだけど。私の行つた時に知らない顔つてのは滅多に見ない。

「大手や外資は強いんですか？」

「それはまた大きく出たね、でもまあそういう事なのかもね。小さな喫茶店より大型チェーンの方が入りやすいんだよね。常連さんも大事だけど、そればっかりじゃ新しいお客さんは入れない。それに長話ばっかしてると回転率が問題だよね。本当、新しいお客さんにも来てもらわないと先はジリ貧かなつてさ。」

そう語る彼は、とても眞面目に店の事を考えている。就職失敗して押しかけたとか言つてたけど、それは冗談めかしていただけで、本当の所は違うような気がする。『店を引き継いで、続けて行きたい』そんな決意が見えた気がした。

「だから今、集客作戦考えてんだけど、何か無いかな？」

「おー、面白そうですね。」

「そう？」

賛同されて悪い気がしなかつたのか、嬉しそうな表情を見せる。

彼がこの顔であそこにいるだけで、一部の層の集客効果は十分にありそうだ。

「とりあえず、外から見える位置に文絵さんが居れば、イケメン好きの女の子や、若い男の子が好きなおばさんだけは増えるんじゃないですか？」

「……ねえ、それ素直に喜んでいいのかな？」

「もちろん。間違いなく褒めてますよ。」

言い方が直接的過ぎたのか、にこやかに言つたのに複雑な顔を返された。看板娘じゃないな、息子？ の効果はきっとバカに出来ない。

「面白い子だね。」

「はい、似たような事はよく言われます。」

ついさっきも、史稀に『変なやつ』と言われて来たばかりだ。私は別にそれを嫌だとは思わない。むしろ褒め言葉だ。その方が普通と言われるよりよっぽど良い。

「あ、でも今の雰囲気壊すと怒られますよね？」

「そこなんだよねー。」

彼は、顎に手をやり眉根を寄せる。そして極端な事を言い出した。「流行りものだからって、メイドとか駄目だよねー？」

「それは完全に店が変わってるじゃないですか？ 怒られるとか通り越して、常連さん近寄れなくなりますよ？」

「やっぱり駄目か。」

「ある意味面白そうですが、けど、それ人件費かかるんじゃないですか？ あ、文絵さんがメイドやるとか？」

「高校ぐらいの時ならまだしも、今この体格じゃ女装は自信がないなあ、執事でいい？」

女装を勧めても怯みもせず軽快に返事が返つて来た。この人は相当ノリがいい。そして、話術が巧みそうだ。『敵に回してはいけない』本能的にそう思う。

「格好だけなら平氣かもしないですけど、田那様とかお嬢様って言つてると、確實に引かれるんじゃないですか？」

常連＝マスターのお友達。つまり年輩者の多い常連さんは、どれだけの許容範囲があるのでだろう？ うちの母は面白がつてこき使いつる気もするが、それは完全に少数意見だと思つ。

そして私もそんな変化は望んでない。勝手な感傷、勝手な意見だとこう自覚はあるけど、家族の思い出である通い慣れた場所は、そ

のままであつて欲しい。

「だよねえ……。」

「あ、ちよつとすみません。」

話していく途中、不意にコートのポケットが揺れた。取り出した携帯は「ワルキュー」の行進を鳴らしている。着信だ。

一いつ折りのそれを開くと『和歌奈』と表示されていて、思わず時間確認した。右上に表示された18：21という文字に、そのまま切つてしまおうか？ なんて考えが過ぎるものなの、それをやるときっと後が怖い。

その間にも徐々に大きくなつていく音量に、私は諦めて通話ボタンを押した。出なくたって何を言われるかくらいは想像がつく。絶対に遅いっていうお叱りの電話に違いない。

『おねえちゃん遅いっ！』

耳に当てるとすぐに妹の大きな声がして耳から離した。お願ひ、もつとボリューム考えて欲しい。

「じめん、じめん。」

『もー、お腹すいたよー？ おねえちゃんいつまで買い物してんのー？』

「分かつたから、分かつた。早く済ませて帰るから待つて、じゃ。

』
さつさと話を終わらせ、一方的に電話を切った。長引いた所で『遅い』と『お腹がすいた』以上の言葉はどうせ出でこない。空腹でカリカリするの何とかならないかな？ って思つけど、そういう子供っぽい所が姉としては嫌いじゃないから何も言わない。

『ごめん、随分時間食っちゃったかな？』

そう謝った文紘さんも、携帯を出して時間を確認していた。結局10分くらい立ち話をしたのかな？ でも、謝られるような事じやがないんだな。

「いえ、文紘さんのせいじゃないですよ。実はここに来る前に、もう道草しちゃってるんですね。……私、普段から寄り道多いから、

妹にはよく怒られてるんです。」

「あそなんだ。何か想像付く。」

「……もしもし？ 何を想像して笑ってるんですか？」

「でも美晴ちゃん偉いよね、自分が忙しいから家事のほとんどをやつてくれて助かるって、お母さん言つてたよ。そんなの今時なかなかないよ？」

母さんつてば余計な事を……。

「別に偉くなんか無いですよ。その方が効率が良いだけです。」

本当にこれが全てだ。

私は別に特別な事をしているつもりは無い。家の事は家族の誰がやつたつていい。母さんは外で仕事をしてるから、時間のある私がやつているだけだ。それに私は美味しいご飯が食べたい。だから妹に任せるのは安心出来る範囲でのみだ。『偉い』とか『凄い』と思われるるのは違うと思う。そしてとても苦手だ。

「ところで、クラシック好きなの？ それともワルキューレ限定？」
「はい？ たぶんクラシック全般好きですよ。専門的に勉強してるわけじゃないから、詳しくはないんですけど……。」

一つ前の質問からの急激な変化に、質問の意図を量りかねる。駄目だな、やっぱり彼の方が一枚上手だ。

「そつか、美晴ちゃんありがと。おかげでちょっとこいつ事思いついたよ。」

「おかげって、何もしてないですよ？ 所で、どんないい事思いついたんですか？」

「まだ内緒。ちゃんと形になつたら教えてあげる。だからまたお店に来てね。」

「はあ。」

ほくほくとした表情つてのはこんなのかな？ そんな事を考えて彼を眺めていると、手にした携帯がまた鳴った。

「今度はラ・カンパネラか。メールかな？ 早く帰つてあげないとね、」

正解。この曲はメールの着信だ。

「……そうですね。」

彼の予想に違わずそのメールは妹からで、内容はタイトル無しの『お腹すいたのーー』の一行のみ。本当に夕飯を急がなくてはいけないらしい。

乾いた笑いを漏らした後、私は彼と分かれて残りの買い物を急いで済ませた。そして帰宅後、腹ペコ怪獣の妹に、散々文句を言われた事は言つまでも無い。

実は何かが変わったのかかもしれない

「美晴、最近楽しそうね？ 何か面白い事でも見つけたの？」

朝食時、笑顔で問う母の言葉に、自信作の玉子焼きを口に入れ損なつた。

「あら、落ちたわよ？」

分かつてゐる。そんな実況はいらない。

「……えっと、何で？」

母は食後のお茶を啜りながら、楽しそうに私を眺める。その行動にとても嫌な予感がして、その視線から何とか逃れたいとは思うものの、母の席は真正面である。

いや、そもそも逃げる理由なんか無いはずなのに、どうしてこんなに居心地の悪い思いをするのだろう？ 追うから逃げる。逃げるから追う？ 強いて言えばそんな心境だらうか？ ただ實際、こういつ時の母は油断ならない。母には娘をからかって楽しむ悪い癖があり、この危機感はその経験から生まれたものに他ならないからだ。「何でって、美晴が楽しそうだからよ？ 美晴は何かに熱中している時、とても楽しそうなんだもの。」

母は事も無げに言つてくれたが、残念ながら自覚は無い。そうか、見るからに楽しそう……にしてたのか。反省、反省。もつとしつかり隠しておかないと。そんな簡単にばれるようだと、色々な事に支障をきたす。

「えー、おねえちゃん、今何かの作戦やつてんの一？」

諜報員1号」と、3つ離れた妹の和歌奈も、興味津々に話に加わる。

「別に、何もやってないよ。」

作戦なんてのは本当にやつていない。聰太くんの「写眞」と、修学旅行の時の葵写眞の販売は近々やろうと思つてゐるけど、今はまだ準備もしていない。それに、わざわざ作戦名なんか付けてはしゃこてるの

は妹の方だ。

でも確かに最近は充実してる。史稀の事を探るのは楽しいし、文紘さんが考える『いい事も』とても気になつていて。好奇心が刺激される事ばかりで、確かに浮かれてたかもしない。

「えー、何かやる時は教えてよ~? また、理佐ちゃんと一緒に協力するからね!」

理佐ちゃんは聰太くんの妹であると同時に、妹と同じ年の親友だ。ついでに『兄思いの妹』である前に、相当の『お祭り好き』でもある。私の諜報員2号として積極的に活躍してくれているのも、そんな所があつての事だ。友達と一緒に騒ぐのは楽しい。しかも、特別な状況ともなれば更に楽しい……という所だろう。

「はいはい。まったく立派な協力者が居て、私は幸せ者ですよ。」

のりの佃煮の載ったご飯を、妹はとても美味しそうに食べている。私はそれを眺めながらお茶を啜つた。まだご飯は少し残っているもの、肝心の食欲の方が母のせいで何処かに行ってしまった。

「さて、私はもう出る準備しなきや、いい報告があつたら教えてよ?」

壁の時計を見た母は、食器を流しに置いた後、そう言い残して慌しく洗面所に消えた。確かに、私もそろそろ準備をしなければならない時間だ。でも、その前に食器は洗つておきたい

「和歌奈、早く食べちゃつて。」

妹を急かして、自分の食器を流しのタライに置き水を張る。じつと蛇口から出る水を眺めていると、自然と溜息が零れた。

基本的に私は母には敵わない。親子であるせいだろう、似たもの同士である事は間違いない。イタズラ大好き、好奇心旺盛、お祭り好きのお節介。母も私もそんな性分だ。

しかし、そうであるが故に、経験値という点に於いては、どうしたって母には適わない。私の行動そして思考というものが、読まれてるんじゃないかと時々感じる。

もちろん母の事は好きだ。感謝してるし、尊敬もしてる。けど、

苦手意識が無い訳じゃない。はつきり言って今更に、その苦手意識の真っ最中だ。

……いい報告つて何？ 母は一体何が言いたいんだ????.

しかし、それからも私は史稀を見かける度に声をかけ続けた。母の言葉の謎は、今いくら考えたって分からぬ。それより史稀を探して、彼の事を知る方が楽しい。

基本的にまずは溜息を吐かれる。それから鬱陶しいとばかりに無視しようとしてくれる。けど負けない、そのくらいの方がやる気が出るつてもんだ。

「史稀は何してるの？ 私はこれから買い物行くんだけどさ。」

「ねえ、今日は見える？ 見えたらいんなのか教えて。」

「いつまでそうしてるの？ まさか一日中とか？」

「史稀つてさあ、どんな集中力と忍耐力してんの？ 私は飽きたら止めちやうな。」

私は彼にひたすら話しかける。

彼は彼で迷惑そうにしつつも、結局は律儀に返してくれる。そんな態度が面白くって、私はつい笑ってしまう。すると彼は、少しむくれる。

そんな他愛の無いやり取りが、楽しくてしょうがない。

「田では見えないものを見ようとしてる。」

「まだ見えない。見えたらいんだけどな。」

「時間はあるさ、まだ。……今の所はな。」

「集中は切れるまで。時間見て驚く事もあるな。」

何を言つてるんだか分からぬ部分もあるけど、総合していくば

そのうち考える全貌が見えるかなって、とりあえずふーんって聞いてた。

そのうちそんなに邪険にされる事も無くなつて、溜息の種類も何となく変わつた。彼の張つてるバリアも『『』』しちゃうがないな』つてくらいのレベルまでは落ちたような気がする。何となくだけど手ごたえがあつて、ここまで続けた甲斐があつたつてもんだ！ って、私は更に張り切つていた。

そして今日は、学校からの帰りに史稀を見つけた。大体いつもこのくらいの時間に彼を見かける事が多い。

でも今日は、じつと何かを見るんじゃなくて、家の傍の横断歩道で信号が変わるのを待つてている。私は『珍しいっ！ これは絶対捕獲だ！！』つて肩にかけた鞄を抑えて全速力で走つた。だつて本当に珍しいんだよ？ 彼の日常風景つて。

「史稀！」

信号が青に変わる寸前、歩き出すより前に彼のコートの袖を掴んだ。急に走つて心臓バクバクだけど、目的を果たした達成感で充実している。

>↓34403 — 4204 <

「……またお前か、懲りないなあ。」

驚いた様子で振り向いた彼は、その言葉ほど呆れた様子は無い。相変わらずの邪魔な無精ひげと、何にもしてない髪の毛。このフラつと出てきましたつて感じは、近くに住んでるんだろうか？ それともただ無頓着なだけだろうか？

「うん、だつて、見かけた、から。」

「見かけても、放つとけばいいだろう？」

「だつて、何か、せつかくなのに、嫌じやん。」

弾む息を整えながらじや、切れ切れにしか言葉が出なくてどちらか
しい。そうしてるうちに信号が変わり、南北方向の車が動き出す。
内心悪かったかな？ と、思いはしたけど、彼が不満を口にしなか
つたから、まあいいかとそのままにした。溜息は漏れてたけどね。
「何で？」

「面白いもん。」

即答だ。私の行動基準には『面白い』か『面白くない』かが大い
に係わってくる。

「……何だそれは？」

でも私は笑つて誤魔化した。こいつのは感覚的なもので言葉に
は出来ない。言い換えればこれが私の性格で、こいつであるからこそ
『私』なのだ。

すると彼は、目を瞑つて上を向きしばらく黙り込む。

一体何を考えてるんだろう？ 私は彼の出方を待つ。どうせまた、
大いに呆れられてでもいるんだろうか？ しかし、その予想は大き
く外れ、もう一度歩行者信号が青に変わった頃に、彼は突然不思議
な事を言い出した。

「じゃあお前、絵のモデルやらないか？」

「はっ？ 何？ 絵？」

「そう、絵。」

「……ひょっとして史稀は、画家？」

そう問うと、彼は薄く笑いこう答えた。

「なりたいとは思つてない。」

そうかそうか、卵なのか。私の中の彼のメモに『画家の卵』と肩
書きを追加しておく。私の推測ではないきちんととした情報は、たぶ
んこれが初めてだ。インテックスの名前だつて自称でしかない。

しかし、前途多難つてやつなのかな？ 彼の笑みには焦りと自嘲
が混じつている。頑張つても報われないのは辛い。でも、その努力
の全でが報われるほど、この世界は優しく出来ていない。同情なん
てする気はないけど、何となく自分の将来を重ねてしまう。芸術の

道は厳しい。母に憧れて、写真の道に進みたいと思つてゐる自分にとって、それは人事ではない。

「普段物や風景を見て描いてはいるけど、人を描いてみるのも面白いかなと思つてな。」

「面白い……つて私の真似か？　でも納得は出来た。絵を描くためになんなに真剣に見てたのか。」

「ふーん、いいけど？　あ、ヌードでも描く気？」

「それは興味無いな。」

残念ながら後半の冗談は、冗談とも取つてもらえず、間髪入れずにあっさり否定された。まあ、肯定されても困るけど、でもその反応は何だか面白くない。別に自分の姿勢に自信があるわけじゃなし、そんなに胸がある訳でもない……けど、私にも女のプライドはある。勝手に傷付いただけだけど、心の奥に仄暗い炎が宿るのを自覚した。

「……じゃあ、どんな絵描くの？」

「目には見えないもの。」

私のテンションが下かろうが高かろうが、彼の答えは以前と変わらない。けど、目には見えない私って何？　やっぱり彼の言う事はいまいち分からない。

「一体何を描く気なんだ？」

煙に巻かれた心地がして不満いっぱいの私は、傷付いた分も上乗せして、疑惑の目を思いつきり彼に向けてみた。けれど、彼は私に笑いかけて横断歩道を渡り始める。

「まあ楽しみにしどけ。じゃ、俺コンビニ行くから。」

気が付けば信号は再び青で、呆然としてるうちに点滅が始まる。道を挟んだ反対側には、薄く明るい緑色がイメージカラーのコンビニがあつて、確かに何かのコラボの新メニューのキャンペーンをやってたはずだ。彼の姿がその店に消えるまで、何故か私はじつと見ていた。

「……なんだ、史稀も笑えるんじゃん。」

そして私は、本人が聞いてたらたぶん怒りそうな感想を、はつき

りと口にした。でもその頃は、動を出した車の騒音にかき消されてしまつ。

それに、もう落ち着いていた心臓が、また激しくバクバクしだした音も、たぶん騒音が焼き消してくれていたと思つ。

音楽を聴いて思う事は人それぞれだ

店の扉を開けるといつものようにベルが鳴った。しかし、いつもとは何かが違つて妙な気分になる。

「あ、美晴ちゃんいらしゃい。」

この声の主は文紘さんで、客の居ない店内で一人グラスを磨いている。そうだな、気分は貸し切り?でも、この間の話を思い出すとさすがに心配になる。

「約束通り来ましたよ。」

何か一緒に注文した方がいいのかな?って考えた時、やつと気が付いた。

「あ、そつか。サティだ。」

「当たり。ジムノペディ。よく分かつたね?」

カウンター席。彼の目の前に座ると、すぐにおしどりと水が置かれる。少し意外そうな反応をする彼に私は少し得意な気分になつた。「曲自体は有名じゃないですか。色々BGMで使われてるし、これ幻想的でいいですね。」

愁いを帯びたピアノの音が、店内に溢れている。その澄んだ音に耳を傾けていると、水の隣に注文していないミルクセーキが当たり前のように置かれ、くすぐつたい氣分だ。マスターだけでなく、文紘さんも同じようにしてくれる事がとても嬉しい。

「はい、美晴ちゃんスペシャル。」

「あ、どもです。」

早速カップに冷えた手を伸ばして両手で包み込むと、じんわりと温かい。口に運ぶといつもの甘さが広がり、思わず顔が緩む。味も温度もマスターが用意してくれるのと一緒にホッとした。

「そうだ。ねえ、マスターは?」

そしてこれはいつもと違う。今まで一人だったから、当然といえば当然なんだけど、いつもカウンターの向こうにいるマスターが、

いない状況というのは初めてだ。

「ああ、じいちゃんは出前中。昔馴染みのどににね。」

「出前？ マスターが？」

文絵さんが入った事で自由な時間が出来たのかもしない……とは思っていたけど、まさか出前？ しかも御大自らつてどりいう事だ？ つて、でもそれは私の早とちりで、それにはまだ続きがあった。

「もう店に来れなくなっちゃった人の所でね、お見舞いも兼ねてるからどうせしばらくは帰つてこないよ。ついでにちょっとお願ひ事もしたしね。」

「なるほど。」

……そつか、それなら納得だ。でも誰だろ？ 三滝のおばあちゃん最近見てないし、高畠のおじいちゃんも会つてないな。見かけなくなつた人達を思い出して結構しんみりしてたのに、その雰囲気をぶち壊して突然晴れやかな声が上がる。

「だからね、今は自由時間。」

ちょ、ちょっとそれ台無しだから。でも私の思いなんかお構いなしに、サボリ宣言をした彼は、涼しい顔で自分のためのコーヒーを注いだ。

「そうだ。ねえ、知つてる？」

ゆつたりとコーヒーを楽しんでいた文絵さんは、思い出したよう口を開く。

「この曲は、ギリシャ神話の神々を称える祭りの絵を見て創作されたらしいよ。」

「そうなんですか？」

このジムノペディは、ゆつたりとした染み入るような曲で、私の抱いているのギリシャの神々のイメージとは大きく異なる。この神話の神々は、守る者ではなく畏れられる者。もっと荒々しくて、人間くさくて、滑稽で、利己的だ。その気まぐれや、欲、そして嫉妬

で人間は多大な被害を被る。でも、抱ぐイメージは人それぞれ……
という事なのだろう。

「夢のイメージみたいな曲だと思つてました。」

そう、私はそんな風に思つていた。

「そつか。でもこれ、全裸で踊る様子を描いた壷の絵らしいんだな。」

「むせた。おまけに咳き込んだ。それほどまでに衝撃を受けた。裸で踊るつて何！？」

「大丈夫？」

「……はい、ものすごくイメージとかけ離れてただけです。」

「美晴ちゃん、変な想像した？」

「はい、過分に……。」

私は口にするのも恥ずかしいほどの乱痴氣騒ぎを思い描いた。でもそういうえば、古代のギリシャでは神聖な儀式全裸で行う。なるほど、ならばその絵というのも、そんな場面を描いたものかも知れない。

「美晴ちゃんもか、やつぱりそう思うよね？」

彼と二人、顔を見合させて一通り笑つて、一息ついたところで彼は改まって口を開いた。

「昔の壺を見てさ、遙か古に思いを馳せる。この曲は、そのサティの物思う部分なんじゃないかなつて、俺はそう解釈してみたんだ。」

彼はカップの中のコーヒーを見つめて語る。

「もう信仰する人のいい、物語として伝わるだけの神々。そして信仰している人々を閉じ込めた絵……そういうのってロマンを感じない？」

そして私を見て優しく微笑む。けど、素直じゃない私の心中は複雑だ。

「全然視点が違うんですね。」

そんな所まで考えられなかつた自分が歯痒くて、思わずカップを掴む手に力が入つてしまつ……けど、そんな自分も情けなくて、こ

つそり深呼吸をして力を抜いた。

「そうかもね。音楽家は口マンチストだよね。俺も最初解説聞いた時、頭抱えたんだよ。この考察は、もう一度改めて考えてみた結果。まあ、当たつてるかどうかはサティに聞いてみないと分かんないけどね。」

都合良く勘違いしてくれた彼は、やたら優しい顔をする、思い出し笑い……なのかな？ うん、その時の事でも思い出しているのかかもしれない。

人の悪い私は、それをからかいたくなつたけど、たぶん私には扱いきれない。彼の方がずっと上手だろうと本能的に感じ、からかうのは止めておいた。

やがて曲が終わり、ピッピツという雑音の後に訪れた静寂は、とても不自然で落ち着かなかつた。同じ空間に変わらない人物。けれど、ただ間に曲があるというだけで、その空間の印象がまったく違う。

男の人との距離感が実はよく分からなくて、とりあえずふざけるようにしてる私には、まだ文絵さんと二人だけつて状況は苦手らしい。BGMの効果は偉大だ。

「次、何がいい？」

だから彼の申し出にホッとした。

カウンターから出た彼を私は自然と目で追う。彼は年季の入ったレコードプレイヤーの前に立つと、回転盤の上のレコードを丁寧にケースに戻した。

プレイヤーは長年磨かれて艶の出た木製の筐体。その横に置かれた大きなラックには大量のレコードが納められている。これもマスターが大事にしてるもので、CDすら廃れてきた今もずつと現役だ。しかし、私も曲を探そうとラックに近付くと、ラックの状況が違っていた。余裕を持って置かれていたレコードは、ぎつちりまとめて押し込まれている。そして、空いた筈のスペースにはクラシック

のレコードが見事に埋まっていた。

「クラシック好きなんですか？」

パッケージを適当に引っ張り出して一枚づつ眺めながら、以前ス

ーパーでされた質問をそつくり返してみる。

「まあまあかな？ 母が好きでさ、昔は家にいると何かしら流れて色々と聞かされたな。最近はCDに取つて代わられてるから勝手に持つて来たんだ。」

「いいんですか、それ？」

「気付いてないんじゃないかな？ これどう？」

「好きですけど、喫茶店のBGMじゃないですね？」

彼が持つパッケージの、指差した場所にはブライムスの『ハンガリー舞曲 第5番』と記されている。激しい情熱と垣間見える弱さがアクセントのドラマチックな曲は『チャップリンの独裁者』でも使われた曲だが……店内のBGMには向かないだろう。

「まあそうかな、俺もこれ好きなんだけどな。じゃあ無難にピアノ・ソナタ？」

何故か残念そうな言い方をするんだなと感じたが、その理由はすぐによく解る。

「でもさ、他にお客さんいないんだから好きな流しちゃおうよ。なるほど。BGMの選曲ではなく鑑賞会のつもりらしい。よくよく見れば、彼が手に取つて選んでるのは交響曲ばかりで……って、あれ？」

「そういうえば、カラヤンの指揮ばつかですね、」

「うん、ファンだつたらしいよ。彼が亡くなつた時は、部屋閉じこもつたまんまで来なくつて、うちの食糧事情が大変な事になつたんだつて。俺は小さかつたからあんまり覚えてないけど、親父が必死に料理してた姿は記憶にあるなあ。」

いかにもおかしそうに笑つてゐるが、そんなレコードを勝手に持ち出していいんだろうか？ 本当は大事に保管してしてあつた物なんじやないかと、緊張しながら改めて棚を眺めていると、気になる

一枚を見つけてしまった。汚したり傷を付けたら一大事だなと思い、私は慎重にかつ丁寧に出来るだけそつと抜き出した。

「マ・メール・ロアだ。」

モーリス・ラベルのマザー・グースを題材にしたピアノ連弾の組曲。なので、もちろんカラヤンでは無い。テレビなんかで所々聞いた事はあるけれど、全部を通して聞いた事はない。

「それ聞く？」

「はい。」

彼に手渡すと、慣れた手つきでパッケージから取り出し、そろりと盤に乗せた。

特有のプツプツという音の後、緩やかにピアノの旋律が流れ始める。最初の曲は『眠れる森の美女のパヴァーヌ』美しくも儂さを感じるメロディーが店の中に溢れ出た。

これはピアノの曲だけど、BGWには向かないなと感じた。こんなにスゴイ曲を、聞き流してしまってもったいない。

丁寧に奏でられるピアノの音は、鳥肌が立つほど優しさが込められていて、私は言葉が出なかつた。それほどまでに今までに聞いた曲とは全然違う。私はピアノなんて弾けないから偉そうな事は言えないけど、同じ楽譜を使っても、人によって奏でられる音が違うという事実に、改めて驚かされた。

そんなレコードをちゃんと持つている文絵さんの母親は、本当に音楽が好きなんだなと……本当にそんなレコード持ち出して良いのか？ と、私はもう一度心配になつた。

「あのね、最近ここで色々クラシック流してるんだ。」

曲が2つめの『親指小僧』に変わり、湧き上がる水のように螺旋のメロディーが流れ出た頃、文絵さんがまた話し始めた。最初の曲は始めから終わりまで、一人とも黙つて聴いていた。私は何も喋れなかつた。……つてのが本音だけ。

「何か理由あるんですか？」

「うん、予習のためには。」

「予習？　コンサートにでも行くんですか？」

「外れ。」

まだ棚でレコードを物色していた私が振り返ると、カウンターに戻っていた文絵さんは、一杯目のコーヒーを注いで悪戯っぽく笑った。

「ここで生演奏やつてもらう事になつてね、お姉さんに予習させてるの。」

……そっか、私が予習させられてたんだ。そんな明確な理由があるとは思つてもみなかつた。こういう表情が嫌味にならずに似合う人つて、看板としての素質があるんだろうなつて、彼を見るとつづく思う。

「音大生に伝があつてさ、食事で釣つて週末にやつてもらう事にしたんだ。来週の金曜から始めるからよかつたら来てね、ぜひお友達と一緒に。」

後半の部分に力がこもつている所が何とも言えない。

「分かりました、声掛けてみますよ。文絵さんのお給料のためにね。だから私も、後半の部分に力を込めて返した。

それから一人で大笑いして、笑つてゐうちに曲は『パゴダの女王、レドロネット』の、どこかエキゾチックなメロディーに変わつていった。

気まぐれ Cake Cooking

夕方学校から帰ると、適当に脱がれた妹の靴ともう一つ。別の靴がきちんと揃えて玄関に置かれていた。おそらくは理佐ちゃんの物だろう。

私はそう予想をつけたが、たぶんきっと外れてない。その証拠に、奥から聞こえる楽しそうな声……の片方は理佐ちゃんだ。

そんな事を考えながら自分の部屋に入り、荷物を置いて着替えを済ませる。そして、休みの日に撮った写真を現像しようと、母の仕事場である現像室に向かう途中、ついでに空の弁当箱を置きにキッチンに寄ると……理佐ちゃんと妹が真っ白になつて驚いた。

流し台を見れば、口の開いた小麦粉の袋と、粉まみれのボウル。なるほど、白い粉の正体は分かった。でも、中世のヨーロッパじゃないんだから、頭に小麦粉振りかける必要は無いと思う。しかもブロンドじゃ無いから、急に白髪にでもなつたみたいで違和感があるな……って、真面目に考えてしまつた私はどうなんだらつ？

「…………理佐ちゃんいらつしやい。」

「えへへ……お帰りなさい。」

とりあえず挨拶をした私に、真っ白な一人は氣まずそうな笑みを貼りつけ、固まっている。怒られるとでも思ったんだろうか？

流し台の上には、他にも計量器、電動の泡立て器、ケーキ型、マーガリン、砂糖とそれに刺さつた軽量スプーン、卵の殻に、牛乳パックが放置されている。

「ねえ、何でケーキなの？」

「おーつ！」

息ぴつたりに歓声が上がる様は見事で、まったく仲がいいなと感心した。

「何で分かるんですか？」

何故か目をキラキラ輝かせながら、理佐ちゃんが前のめりになつて訊いてくる。けど、何故つて言われても……。

「いや、そこ見れば一目瞭然だと思つ。」

ケーキ型が置いてあるんだから、普通に考えればケーキしか無いだろう。

「えーとね、クリスマス近いからケーキ作りの練習しようかつて話になつたの。」

妹がようやく先程の問い合わせに答えてくれたものの、やつぱり腑に落ちない。理佐ちゃんは知らないけど、料理なんてまったくしない妹が、ケーキを作ろうだなんてどういう風の吹き回しなんだ?

「じゃあ、今年のケーキは手作りする気?」

「んー、別にそんなつもりは無いんですけど……」

「お店の方が、絶対美味しいと思つし……」

私の疑問に一人は目を逸らし、それぞれ歯切れの悪い事を言つている。それじゃあ一体、何のための練習なんだろ?……私は益々二人の考えている事が分からなくなつて、考えるのを放棄した。

「えーと、じゃあ私はどうした方が良い?『1・手伝つ……つて言つつか私が作る』『2・放つとくから自分達で最後まで頑張つてみる』をあどつち?」

「あのー、『3・もうやめる』つてのは無いですか?」

理佐ちゃんは、控えめながらも選択肢を追加した。私もその考えに便乗して、もう一つ選択肢を増やしてみる。

「じゃあ、『4・自分達でキレイに片付けて終わる』でもいいよ。いくら散らかしてくれても、自分達できちんと片付けてくれるのなら私は別に構わない。しかし、結局一人で協議した結果は、期待通りとはならなかつた。

「1でお願いします。」

「……ですか。じゃあ、先ずはベランダで粉払つといで、二人共真つ白だよ。」

はーい、と殊勝な返事をしながら出て行く一人を見送つて、私は密かに溜息を漏らす。

「別に、最後までやつてくれても良かったんだけどな……。」

今は私一人だから、そうこぼしてみた。

二人を追い払つて改めてキッチン眺めると、そこは予想以上に酷い事になつていて、思わず笑つた。特に途中でひっくり返つたらしい、ボウルの中身がもつたいない。しかし、これはこれで仕方が無い……と、割り切るしかないんだろう。彼女達も頑張つてたんだ……途中までは、だが。

これがレシピかな？ マグネットで壁に張られた印刷物を外し、目を通す。至つて普通のスポンジケーキの写真の横に材料と、下には手順が記されている。

私はそこに書かれた手順を眺め、もつと効率の良い手順を再構築していく。だつて、洗い物は少ない方が良い……と言つても、この状況を考えれば今日はさすがに手遅れ……か。

途中の生地に少し手を加えた後、指定より少な目にした小麦粉を振るいにかけている所で一人が戻ってきた。

「さすがおねえちゃん、もうここまでー？」

「美晴さん早い！」

いやいや、君達がベランダで遊んでいただけだよ。と、内心では思つたものの、口からは違つ言葉が出る。

「慣れだよ。」

ゴムべらで小麦粉をさつくりと混ぜ合わせ、クッキングシートが貼りつけてある型に混ぜ合わせた生地を流し込む。貼りつける作業は面倒だから、これがやつてあるのはグッジョブだ。

あらかじめ予熱しておいたオーブンに入れて、スタートボタンを押す。正しくは電子レンジのオープン機能なんだけどさ。とにかく後は25分後に呼ばれるのを待つだけだ。

さて、その間に片付けようか……と思つたものの、カウンターの向こうからじつと見てゐる一人が非常に気になる。

「……洗い物くらいする?」

そう声をかけると、

「うん、そのくらいは出来るもん。」

と、妹は不貞腐れたように返してきた。

一人に場を譲り、私はとりあえずソファに陣取りテレビを点けた。時間を考えれば、写真の現像なんて後回しだ。まだ宿題も手付かずだから、今日の事にはならないかも知れない。

それにも……今日の晩はどうしたものか? 毎日やつてると、献立なんか思いつきもしなくなる。

テレビに何かヒントは無いものかと、ローカルニュースを見ていたものの、水族館に新しい仲間が増えたとか、街のイルミネーションが始まつたとか、豪華おせちの中身に、デパートの中身丸見えの福袋。クリスマスまでだつて、まだもう少しはあるつてのに、それをすっ飛ばして正月の話題に随分と熱心だ。でも、私にとっては、まだまだ先のおせちなんかより今晚の方が大問題だ。

キッチンからは、まだ楽しそうに洗つている音がする。甘い香りが漂いだしてからは、更にテンションが上がつてた。

ぼんやりとテレビを見つめ、頭の中では冷蔵庫の中身を思い浮かべる。本当に何作ればいいんだろう?

やがて電子音が鳴り、結局何も決まらないうちにレンジに呼ばれた。キッチンでは歓声が上がつてゐるもの、私はそんなにお気楽な気分になれない。

溜息と共に勢いをつけて立ち上がり、キッチンに向かう。二人を避けて奥に入りレンジの扉を開けると、後ろから再び歓声が上がる。……そんなに喜ばれても、まだ焼けてるかどうかは分からないんだけどな。

竹串を刺して焼け具合を確認すると、パンや中までちやんと火は通っているらしい。

「うん、焼けてるみたい。」

今迄で一番大きな三度目の歓声が上がり、私は思わず吹きそうになる。まったく呆れるほど元気だ。だけど半面、素直でとても微笑ましい。

「ところでこの後どうすんの？ クリーム塗つたりとかすんの？」

しかし、「一人は顔を見合わせて首をかしげる。

「はっ？」この先の事は、考えてなかつたとか？」

「うーん、どうやつたら美味しいかな？」

「クリームもいいけど、チョコもいいよね？」

まさかの無計画。ここまで思いつきの勢いだけで動いていたとは、さすがに思つていなかつた。私にはこの子達の自由さが時々理解できぬ。否定する氣は無いけど、受けるショックは結構大きい。

「あ……えつと、どうにしても今日は無理だよ？ 冷めないとどうにもできないからね。それに、クリームやチョコも家には無いし

わ。」

既に理佐ちゃんは帰つた方が良い時間で、もちろん今から買いに行くのは勧められない。けれど、一人の意氣消沈つぶりがあまりに見事で、何かフォローしなければいけないよつた気分にさせられてしまう。

「あのせ、明日材料買つてきて、続きをやればいいんじゃないかな？」いつものは一晩寝かせた方が、卵が馴染んで美味しいんだって。

「そうなの？ じゃあ明日続きやつりつー。」

「うん、明日の帰りはスーパー寄りつけ！」

「明日学校で、どう飾るか相談しようか？」

「うん、帰つてから色々考えてみるよ。」

……まったく、機嫌が直るのが早いな。

明日の予定が決まると理佐ちゃんはパタパタと帰つて行つた。この子は何気ない動作が女の子らしくてとても可愛い。おまけに帰り際、「お邪魔しました。」って笑つた顔は、さすが聰太くんの妹だなつて再認識させられた。性格は兄よりずっと積極的で行動的だと思つんだけどね。

……さて。いつもより取りかかりが遅くなつたけど、本当にご飯どうしよう? 困った事に、夕飯のメニューはさっぱり何にも決まつてない。

理想と現実と理由

翌日の夕方、玄関の扉を開けると甘い香りと、カモミール？の匂いが流れてきた。足元にはもちろん靴が一足ある。キレイに揃えられた理佐ちゃんの靴と、相変わらず脱ぎっぱなしの妹の靴。
……面倒だからって言いそうだけど、そろそろきちんとした方が良いぞ？

いつものように力バンを置き、着替えてから奥に向かうと、満面の笑顔の二人が仲良く座っていた。

二人のいるダイニングテーブルには、三人分の少し不恰好でとてもカラフルなケーキと、紅茶がセッティングされていて、アールグレイの香りが鼻孔をくすぐる。なるほど、カモミールの正体はこれだったのか。

「ケーキ出来たんだ。」

「ほら、おねえちゃん座つて座つて。」

「どうぞこちらへ。」

急かされて私が席に着くと、早速食べ始める二人。どうやら私が帰るまでは、おあづけ状態で我慢していたらしい。……その様子を想像すると、あまりにも可愛すぎる。

『じでじ』でしたクリームにフォークを刺し、一口分掬つて口に入れると……衝撃を受けた。甘くなくぬるいクリームと、大量のカラースプレーの組み合わせは摩訶不思議だ。次にスポンジを口に入れると、少々甘めだがまずまずの出来栄えだ。さすが私……なんてね。前に並ぶ一人を見れば、微妙な表情を浮かべている。本当に可愛いなあ、まったくもう。

「美晴さん、ご相談があるんですがいいですか？」

最後のケーキを紅茶で流し込んだ頃、理佐ちゃんがやたら丁寧に訊いてきた。

「どしたの、改まつて？」

そのとても真剣で前のめりな様子に、私は思わず身構える。こういう時は無茶な事を言い出すのがセオリーだ。私だって、母にお願いがある時は、こんな感じに下手から切り出す。

「うちのお兄ちゃんが情けなさ過ぎるんですけど、あれ……どうにかなりませんか？」

ほーら無理難題だ。

それは彼女が常日頃から言つてる事だけど、所詮は聰太くん本人の問題であつて、回りの人間がいくら騒いだ所でどうにもならない。「どうにかつて言われても、彼は一般的に良く出来た部類の人間だと思うんだけどな。」

運動は……まあ、得意では無さそうだが、学業は優秀。しかも、なかなかの努力家ときた。少々人が良過ぎの所があるけど、優しげで人当たりが良いのは大きな長所だ。気弱な中身は難だが、金になる外見をしている。そんな兄を持つこの子は、この上一体何を求めると言うのだろう？ 完璧な人間つてのは、きっとない。

「でも、気が弱いつて言つか、押しが弱いつて言うか、とにかくはつきりしないじゃないですか？ 私としては、もっとしつかりして欲しいんですよ。勉強出来ても運動出来ないのって、何かひ弱になつて思いませんか？ 私は男らしくてスポーツ万能の兄が欲しかったんですよ！」

男らしいスポーツマンが理想と言うなら、それは確かに……聰太くんとは完全にタイプが違う。そこまで求めてる方向が違うとなると、もう改善とかいうレベルでは無い。家での彼はそんなに情けないんだろうか？ でも私から見れば、彼は今のままで十分面白い。たぶん本人は嫌がると思うけど、そこがいいんだ、そこが。

結局、彼女の言つてる事は『無いものねだり』なんだろうな。って思う。

「えーっ、聰太くんはカツコイイと思うよ。じゃないと写真なんか売れないよ？……まあ私のタイプじゃないんだけどさ。」

和歌奈、それ同感だけど全くフォローになってない。

「外見なんて別にどうちでもいいんだって、結局最後は中身なんだよ？」

「うん、もちろん中身は大事だよ？ 優しいってのは必須条件だし。でもさ、やっぱり見た目も大事だと思うな。それから、お金持つてるとか、頭が良いとか、プラスの要素が増えるのは良い事だと思うよ？」

理佐ちゃん、どうしてそんなに悟ったような事言つてるの？ 和歌奈、お前は欲張り過ぎだ。

それからしばらく、好みのタイプについて二人で論議していたが、微妙に意見が重なる部分はあるものの、大部分が平行線の意見は終わりが無く、埒が明かない。

「とにかく！ 理佐ちゃんの理想の兄つてのは……つまり、わざと告白してしまえって事なんでしょう？」

延々論議した所で、結局の問題はここなんだ。

聰太くんと葵はもうずっと両思いなのに、依然としてくつつかない。見ている方が苛付くから、男ならさっさと告白してしまえ！ と、そういう事なんだ。

「そりなんですよ、いつまでうじうじしてんだって話ですよ。」

言葉はきついがこれも兄を思う形なんだろう。……しかし、本当に彼も大変だな。こんな所で家族と部外者から、こんな扱いを受けているなんて思つてもいいだろ？

「でもさ、見てる方は結果が分かつてると、本人達がわかんないのはどうしてなんだろうね？」

「和歌ちゃんそうなの！ だから見てて苛々するのっ！」

妹の疑問に理佐ちゃんが、そつだとばかりに声高に訴えた。うん、

それはそれで分かるんだけどさ、でもたぶん違うんだな。

「それはさ、きっと当事者だからだよ。自分がどう思われるかってのと、どう思われたいかつていう間にいるから、客観的な見方ができないんだよ……たぶん。」

私は彼らじゃないから推測しかできない。だから『たぶん』だ。もちろん性格もあると思う。もし航であれば後先なんか考えずに、先ず動く。例え結果がどうであろうと、それはその時考えればいい。あいつはそういうやつだ。

でも聰太くんはそういうじゃない。彼は石橋を叩いた後も渡るのを躊躇するような、慎重で臆病なタイプだ。だから今の状況でも、平氣でいられるんだ。

「聰太くんが、その気になるまで見守る。……つて事でいいんじゃない？」

理佐ちゃんはとても不服そうだけど、私は手を貸す気なんて更々無い。世の中には、自分で頑張らなきゃいけない時つてのがあるんだよ？ 告白なんてその最たるものでしょ？

「これで終わり。」

私はそう締め括った後、完全に冷めてしまった残りの紅茶を、一気に流し込んだ。そして、やっぱり牛乳が欲しかったな……と、ミルクティー派の私は思った。

「葵、次の金曜日泊まりに来れる？」

文紘さんの集客作戦の口が近付き、教室を出てすぐ葵に声をかけた。さすがに夜に出て来いというのは、向こうの親への体裁が悪いので、うちに泊まつてもうつといふ手段を使つ。

「たぶん大丈夫だけど……何があるの？」

次の授業は、特別教室が集まる3号棟の理科室で行われる。そこへと向かう連絡通路を歩きながら、彼女はパッと目を輝かせた。これまでにも何度も使つた事のある手なので、とても期待をしているらしい。

「うん、なじみの喫茶店で生演奏するんだって。クリスマスコンサートって感じだ。で、是非友達も連れておいで。つていう指令。」

「ふーん、何やるの？」

残念ながら、それは教えてもらつてない。しかし、予習せられたくないのだからクラシックではあるんだろう。

「音大生の演奏だつて言つてたけど、多分クラシックやると思ひ。曲田とかは聞いてないけど。」

たぶん尋ねても、文絵さんは教えてくれない。当田までのお楽しみとか、内緒とかつて、はぐらかされるような気がしている。

一階へと階段を下りながら、しばらく黙つて考えていた彼女は、不意に念を押すように訊いてきた。

「んー、それ夜だよね？」

「うん、そうだけど。」

「じゃあ行く。」

一体何を考えていたんだ？と思ひますが、その結論は早かつた。
……そつか、夜に遊びに出られたら何でもいいんだ？

女の子は一般的に恋愛話が好き……だから困るんだ

金曜の夕方、時刻は18時半を少し過ぎた辺り。葵、和歌奈、私の3人は住宅街に紛れるようにある『Le succurier』に到着した。

そこはこげ茶色と深い赤の庇^{ひわい}が印象的な、結構古い建物だ。だけど今だから、このシックな色合とレトロモダンな雰囲気が、逆にお洒落なんじやないかなって思う。その手の趣味の人なら、思わず写真を撮つてしまいたくなるような、そんな佇まいをしている店だ。

一緒に来る予定だつた母からは、「遅れる。『メンテ。』」という旨のメールが、家にいる間に届いた。……どうやら、また仕事で忙しいらしい。

赤いリボンのリースが掛けられた扉を開けると、いつものようにベルが鳴つた。が、その後、突如響いた破裂音に驚かされた。

「美晴ちゃんいらしゃい。お客さんも大歓迎だよ！」

……いきなりのクラッカー攻撃。飛び出した紙テープと紙吹雪は、重力に逆らわずはらはらと床に散らばり、私はついそれを目で追つてしまつた。

「驚いた？ 美晴ちゃん来たら驚かそうと思つて準備してたんだ。もちろん皆さんも協力してもらつてね。」

皆つて？ そう言われて見回すと、確かに店にいる人達は耳を押さえて笑つていた。何その準備？ そこまでする？ ……いや、うん。私でもやるかもしれない。たぶんもっと大掛かりに。

とにかく、サンタ帽を被つた文絵さんは満面の笑顔で、こんな悪戯をしてかすほどに、やたらとテンションが高い。ひょつとして張り切り……過ぎてるんだろうか？

「確かに驚きましたけど……後で掃除が面倒ですよ？」

「……さすが美晴ちゃん。期待通りの反応が帰つて来ないね。」「何ですかそれ？」

「うん？ もちろん褒めてるんだよ?」

「……それはどうも。文紘さんも、サンタ帽お似合いですよ。いつそ全身サンタでも良かつたんじゃないんですか？」

「うーん、準備はしたんだけどね、動きにくかつたから却下。」

「ねえ、おねえちゃん……誰？」

後ろから妹に引っ張られ、さすがに状況を思い出した。クラッカーと話に気を取られて、後ろの一人の事を忘れてた……なんて正直に言つたら怒られるんだろうな。

「あ、ごめん。こちらは押し掛け店員の北川文紘さん。マスターのお孫さんなんだって。で、約束通り友達と、妹も連れてきました。それと、母は仕事が終わったら来るみたいです。」

「うん、俺もメール貰つたから知つてるよ。カメラマンも大変そうだよね。」

双方の紹介をして、ついでに母の事も同時に伝えたけど、その必要が無かつた事に、たぶんクラッカーの時よりも驚かされた。母さん、いつの間にメアドの交換なんかしてんの？？？

「……という訳で、ご紹介に預かりました北川文紘です。これからご贔屓によるしく。大体いつもここにいるから、俺に会いたくなつたらいつでも寄つてね？」

それにしても文紘さんは、自分のアピールポイントを熟知したような見事な笑顔を披露する。本当にこの人何者なんだろう？ 見事な看板っぷりに感心を通り越して呆れてしまう。その余裕の笑顔の人物に、はじめましてと神妙に挨拶する二人の姿は、まるでアイドルとファンの関係にでもあるようだ。

「本当にありがたいなあ。さあさあお嬢様方、こちらにどうづか。」

キレイにピシッと背筋を伸ばし、指先まで流麗な仕草で一礼する姿に、私はどうしても黙つていられなかつた。

「やつぱり、執事力フェ租つてゐるんぢやないですか？」

嫌味つて訳じやなくて、ただ思つた素直な感想。服装さえ違えば、本当に「執事です」つて言われても、「そうですか」つて返してしまいそうな気がしたからだ。

「こういうのもなかなか。つて、思わない？」

彼はそう言い、悪戯っぽくワインクをする。何、本当に何でこの人そんなに器用なんだろう？　ワインクなんて、そんなにキレイに出来るもの？　そして、もう一言付け加えられた言葉に私はガックリと脱力する事になる。

「実はね、以前執事喫茶でバイトしてた事があるんだ。」

……何？　それはある意味プロつて事ですか？？？

案内された席に座り、私はぐるりと店内を見回した。間違えて別の店に来てしまつたんぢやないか？　つて、錯覚するほど様子がガラリと変わつっていた。でもカウンターにはマスターが居て、間違いじやない事に安堵する。多分、常連は程度の差こそあれ皆そんな風に思うんぢやないかな？

些細な点は、店内が緑と赤のクリスマスカラーに飾りたてられてゐる事。壁にはベルとリボンが飾られ、レコードの横にはキラキラしたツリーがある。150cmくらいかな？　大きな点いは木目調のアップライトのピアノが、壁に寄せられて置かれている事。そして、それを置くスペースを確保するために、大掛かりな模様替えを行われ、イスやテーブルの配置が大きく変わつていた。

ピアノには装飾彫りが施されていて、結構な年代物のような氣がする。磨かれた艶から見て、ここはレコードプレイヤー同様ずっと大事にされてきたんだろうな。と、思ったからだ。

そして、その前には髪の長い女性。楽譜らしき物を持っているから、たぶんあの人人が今日の演奏者の音大生なんだろう。その人は慣

れた仕草で文絵さんを呼ぶと、一人はとても自然に話を始め……その姿に私は『ああ、なるほど』と納得した。以前文絵さんが見せた優しい顔の理由、それはたぶんあの人なのだと。

「おねえちゃん、あの人誰？」

「ねえ、あの格好いい人誰？　どういう関係？」

今度こそからかえないかな？　って考えながら観察してると、葵と妹からほぼ同時に質問が飛んで来る。……って、何その反応？　やたらキラキラした目の妹と、変にニヤニヤとした目の葵。まったく、一体何を期待しているんだか。

「誰つて、だから文絵さん。ここマスターのお孫さんで、関係は客と店員。以上。」

「えーそれだけ？」

「もちろんそれだけ。期待しているような事は、何も無いっての。」

「……つまんなーい。」

きつぱりと言い放った私に、妹ははつきりと不満を口にする。いやいや、つまらないとかじゃなくて、一人の方こそどうしてそう、ピンク色の発想しか出て来ない？　その事に私は深く溜息を吐いた。「あのね、私には今の所、色恋沙汰なんてものは一切無いから。二人とも勝手に変な期待をしないでくれる？　で、彼女はたぶんあの人だと思うよ？」

「正解。よく分かったね？」

ピアノの女性を示すと、すぐ側で文絵さんの声がして、しかも、今言つた事の答えが返ってきて驚いた。

内心慌てふためいて振り返ると、水とおしほりのトレイを持った文絵さんが立つていて。……うわ、しつかり聞かれてる。

「美晴ちゃんの洞察力は凄いね。普通にしてたつもりだつたんだけどな。ひょっとして、バカップルオーラでも出てた？」

「何ですかバカップルオーラって？　別にそんな特殊なものじゃな

くて、何となくの雰囲気ですよ。一人が話してる姿がとても自然だつたから、そう思つただけです。」

「それだけ?」

「はい。」

「……本当に?」

「本当にそれだけですよ。」

もつと詳しく説明するならば、さつきの一人の姿が、父が生きてた頃の両親と重なつたせいだ。

うちの両親は、子供の私ですら間に入るのを遠慮するほど仲が良かつた。大きな夫婦喧嘩なんて見た事が無いし、母さんは少し冗談めかして愚痴る事はあつたけど、本氣で父さんを悪く言つ事なんて無かつた。

今だつて母さんは、父さんの事が大好きだと平然と言つてのける。一体いつまで惚氣る気なんだろう? でも、当たり前だつたその光景は、たぶん私の理想でもある。

……だから、この理由は言いたくない。未だに父さんに執着してるとか、母さんにヤキモチだとか、この一人が親で良かつただとか……そんな事をバラすなんて、恥ずかし過ぎて出来る訳が無い。

人の好みも考え方も十人十色って事だよね

水とおしぼりを運んで来た文紘さんは、来たつきり雑談に興じ、更に盛り上がりかけた所で、やんわりとしたマスターの注意が飛んで来た。

「文紘、お嬢さん方には、何を準備したらいいんだい？」

「いけね。」

そつか、普通に考えたら注文取りに来たんだよね。

ようやくそれぞれの頼んだ品がテーブルに並んだ頃には、既に7時を過ぎていた。葵はカフェオレとチーズケーキ、和歌奈はカルピスとチョコレートケーキ。そして私は美晴スペシャルのミルクセーキとミルフィーユ。

だけどそれは、注文を忘れてた文紘さんのせいって訳じゃない。もちろん話し込んでたのは主に私だが、そういう意味だけでもない。普段ここでのメニューには、ケーキと書かれた、パウダーシュガーのかかつたシフォンケーキしか無い。けど今日はスペシャルな日で、注文した3種類の他にも、ショートケーキとモンブランの計5種類も用意されていた。

だから、全部食べたいって言い張る食い意地の張った妹が、1つに絞るのに相当時間をかけてくれたのだのだ。

「さすがに全部食べたら太るんじゃない？」

そう投げやりに言った私の言葉が効いたのか、ようやくしぶしぶながらにメニューの写真眺め始め、どれにするかを考え出した。だけど……またそこからが長かったんだ、まったくもう！

それにしても、文紘さんの薦め方もずるかった。

「これは今日のイベント用に『緑の庭』って店で特別に作ってもら

つたんだ。こここのケーキは美味しいからね。それに、余るともつた
いないから、是非食べて欲しいな。」

ってさ。『美味しい』って言葉に妹は簡単に引っかかるし、『も
つたないから』なんて言われたら、注文しないといけないような
気分にさせられてしまった。

やつと食べ物を口にし始めたその矢先、チーズケーキにフォーク
を入れた葵が、私の前のマグカップを見ながら微妙な顔をしていた。

「何？ ミルクセーキがどうかした？」

「何かさ、美晴とミルクセーキが繋がらない気がするんだけ？ こ
う思うの私だけかな？」

そんな事を言われても、一体何なら私にぴったりだと思ってくれ
るんだろう？

「そうかな？ おねえちゃんは、ずっとこれだから分かんないや。
カルピスを一気に半分無くした妹は、ストローから口を離して当
たり前のように言いつ。『そ、私はここではいつもこれなの。注文し
なくても、当たり前に出てくるんだ。』

うん、そりなんだよね……確かに、ここではこれって思つてるけ
ど、いつも注文無しで出て来るから、今日は他のものにしてみよう。
……なんて、考える事も無くなつてるような気も……しなくは無い。
そう考えながらミルクセーキを口に運ぶと、いきなり葵が叫ぶ。

「美晴、熱くないの！？」

「…………ちゅうどいに温度で出来てるの。それに、このカップも私専
用。」

確かに私は、こことん猫舌で熱いのが苦手だけどさ、でもそれは
驚き過ぎだと思つ。おかげで危うく溢してしまった所だつた。

「あーなるほど、特注なのね、それなら納得。ところで美晴？ じ
やあどんなタイプなら良いの？」

食べようとしていたミルフィーユが皿に戻つた。下に落ちなくて

良かつたとは思うけど……何がどうして『じゃあ』なんだ？ 失礼なほど納得顔の葵は、少し前の話の流れに強引に戻そうとしてる。

「……その手の話、また蒸し返す気？」

私はあまりそういうのが得意じゃない。だつて恥ずかしいし……だからいつも聞き流す役だつたり、からかう材料くらいにしかしてこなかつた。これまで人の話だつたからそれで問題無かつたんだけど、困つた事に今は私が槍玉に挙げられている。

「だつて、美晴の好きになりそうな人つて想像が付かないんだもの。今までだつて、そんな浮いた話なんて聞いた事無いしね。」

「私もっ！ おねえちゃんの好みは是非知りたいっ！！」

カフェオレに砂糖を追加し、興味津々前のめり気味の葵に加え、妹まで嬉々として参戦してくる。もうまつたく勘弁して欲しい。……聞いた事が無いって言われたつて、本当にそんな事が無いんだから当たり前じやないか。

「二人とも、そんなに氣にするような事？」

私は不機嫌に言うが、一人は当然だとばかりに首を縦に振る。こ……」いづら。

「だつて、もし妙な人がお義兄さんになつたら私困るし。それにおねえちゃんつて、その確率高そうな気がするじゃん！」

「コラ。ちょっと何その言い草？？？ それに、それはお互い様だ。だけど私は早くも諦めの心境になる。何か言わないと、この二人は諦めてはくれない。経験からそう分かっているから、一度大きく息を吸つて吐き、もう一度吸い込んだ。

こういう嫌な事は、さつさと終わらせるに限る。

「外見は悪いより良い方がいい。背も高い方が好ましい。頭の回転が速い人がいい。」

そこまで一息で言つと、二人は呆気に取られた顔をしていた。

「何？」

「……意外と普通。」

「うん、一般的な意見で驚いた。おねえちゃんからそんなのが出てくるなんて、思ってもみなかつたよ。」

本当に君達失礼だろ？ 彼女達の抱いている私という人物の認識を、一度とことん訊いてみたいんだけどいいかな？ だけど、これだけじゃないんだな。

「で、もう一つ。私の好奇心を刺激してくれる人。これが一番大事。」

「そう、たぶんこれが無いと好きになるなんて事はない。逆にそんな人なら、さつき挙げた事なんかどっちでもいいのかも知れない……今までそんな経験が無いから推測に過ぎないけどさ。」

「あー、それなら納得。」

項目の追加で、葵の顔には晴れやかな笑顔が戻った。

「そつか、納得は出来たんだけど……やっぱり私の心は晴れないんだね？」

そして妹は逆に落ち込む。……本当に、失礼だから。人の事でそんなに悩まないで欲しい。

「じゃあ和歌奈の方」」「どうなの？ 私だつて困る義弟は嫌だからね？」

「それは言つてみたものの、私のこのハードルは妹より低い。そしてたぶんその種類も違うような気はしている……だから妹が警戒するんだろうな。」

「私？ んー、私はねー、好きになってくれた人の中から、一番良い人を選ぶの。」

「……え、何？」

妹の口からはとんでもない言葉が出てきた。葵も耳を疑つたようで、すぐさま聞き返したが当然だろ？ 姉の私だつて、もつと詳しく述べないと今の言葉は理解出来ない。いや、訊いても理解出来ないかもしない。

「あのさ和歌奈、それどういう事？」

「どういう事つて、言つた通りだよ。私を好きだつて言つて来た人の中で、一番いいなつて思つた人を選ぶの。」

……「めん和歌奈、やつぱりお姉ちゃんには理解出来ない。

「知らない人にいきなり言われても、面倒なだけよ？ 知つてる人だと気まずくなるし、私はあんまり良い事無いって思うんだけどな？」

意中の人意外からの告白に慣れてる葵は、否定的な意見を心配そうに妹に返す。しかし彼女は、その全てを無条件に断るので、妹の言つてる事とはスタンスが違う。そして私も、葵とは更に違う立場での質問を妹に投げた。

「ねえ、もし…うん、もしもなんだけどさ、誰も告白して来なかつたらどうすんの？」

人間そう都合良く、葵みたいに告白される人間ばかりではない。それはそれで面倒らしいから、聰太くんはもつとしつかりすべきだろうと思うけど……それはそれとして、とりあえず私にはそんな経験がまったく無い。

「おねえちゃん失礼だね？ 私これでも結構モテるんだから僻まないでよ？ でも、良い人つてなかなかいないんだよねー。」

妹の言い分は初めて聞く事だけで、私は混乱しそうになつた。ただ、僻んではない、そこだけは否定したい。

「別に僻まないから……はいはい、それは失礼しました。じゃあそれは置いといて、和歌奈は自分から好きになるとか無いの？」
「だ・か・ら、その人達の中から選ぶんだつてば。」

いや、だから、私にはそんな真似は到底無理だ。ずっと葵を見るから、一方的に惚れられても困るつていうのはよく分かつて。だからどうせなら、自分から好きになりたいつて思つてる。何となくだし、今の所そんな人なんて全然いないんだけどさ。

でも……だから、そんな恋愛観持ち、当然のように不思議な事を

言つ妹が、私には別の次元の生き物に思えた。

とりあえず妹の周辺の事は、今度理佐ちゃんに確認を取つてみるつもりだ。もちろん僻んでる訳じやなくて、本当に妹の事が心配なだけだから。

ピアノの調べと物思い

ざわついた店内にピアノの音が突然響く。耳障りの良い和音人々は話しを止め、ピアノへと視線を注ぐ。

その音を鳴らした女性は、一度大きく深呼吸した後、こちらを向いてニコリと笑う。そして、もう一度大きく肩で息を吐き、改めて指をピアノに置いた。

ピアノの澄んだ音が紡ぐ曲は『We with you a merry Christmas』クリスマスの定番中の定番曲。皆が知ってる曲だけあつてり、拍子を取る人の姿も見える。前に座る葵もそのうちの一人で、頭がテンポ良く揺れている。一方隣の和歌奈は音楽よりも食欲で、残りのケーキにしか興味が無いらしい。

文絵さんはカウンターの中で腕を組み、演奏する彼女を見ている……いや、見守っていると言った感じかな？ その表情はやつぱりとても優しくて、見てる方が照れるほどだ。

「何赤くなつてんの？」

思わず視線を逸らした私に、いつの間に食べ終わったのか、妹が小声で囁く。

「……何でもない。」

本当に何やつてんだか。それに……和歌奈も気付かなくつたつていいのに。

曲が終わると暖かい拍手が響く。彼女は立ち上がりつて向きを変え、恥ずかしそうに頭を下げた。少し緊張し、それでも拍手にホツとしたような、そんな顔ではにかんでいる。

拍手をしながら進み出てきた文絵さんは、彼女に並び傍で何かを言っていた。すると彼女の表情は不意に緩み、満足そうに変化する。拍手の音にかき消され、その声は聞こえなかつたけど「ありがとう

と、口はそう動いたように見えた。

その後行われた文絵さんの紹介によると、彼女は市沢美智留^{いちはわみちる}21歳。フォレスステベルジュ音大でピアノを学ぶ、3回生であるらしい。身長は普通？でも、何となく小さく見える、可愛らしい雰囲気の人だ。明るく染めた髪はきれいに纏められキラキラしたピンが留められている。落ち着いたピンク色のワンピースは、ふわりと柔らかそうなシフォン。胸に付いた可愛らしい花のコサージュも、彼女の雰囲気にぴったりだ。

文絵さんの挨拶は初めから軽い調子で始まり、次第に調子に乗つて行く。しかし隣の彼女は手馴れたもので、鋭い突つ込みで制止をかける。そのまま漫才のような掛け合いに、周りからは笑いが起き、彼女は照れて赤くなつた。まさか台本を用意して訳じや無いよな？

でも、たぶんこれが、普段の一人の姿なんだろう。自然な呼吸、目立たない気遣い、優しい表情、側にいる安心感。一人を見てるとそんなものが伝わってきて……はつきり言って、私には田の毒だ。そうか、これが例のバカツブルオーラってやつか？

和やかな雰囲気の途中に、ようやく母が到着した。身を屈めて進む母に色んな人が声を掛けている。その大半が小さい頃から見知った人達だけど、中には私の知らない人もいる。男女比としては男性が多いけど、客層通りか。

相変わらず顔が広いつて言うか……人気者だな。でも、母がここに通い始めたのは学生の頃からだつて聞いた事があるから……軽く20年以上の付き合いになれば、そりや、知り合いだらけで当然かもしれない。

「じゃ、母さんのどこ行くね。」

母が到着したとたん、妹は一気にカルピスを最後まで吸い込み、

そう言つて席を立つ。「ああ、うん。」

つて、返事も聞いているのかいなか、あつという間に母の隣りの席に収まつた。未だに妹はお母さん子で、私じや不満なのが少し歯痒い。それにしても、フットワークが軽い事……。

楽しそうに話しかけている妹に、母もカメラを取り出しながら、笑顔でそれに耳を傾ける。余計な報告してなきやいいんだけど……。

仕方なく答えた理想のタイプの話なんかされてた日には、後で絶対母にからかわれる。それは勘弁して欲しい。

妹はいつも、思つた通りに自由に動く。後先なんかきっと考へてない。不満だつて平氣で言つ。もちろん腹の立つ事だつてある。だけど、ぐるぐる変わるその表情に、悪意を感じない。だから結局許せてしまひ。

『妹』つてのは得なのかな? つて何となく考へてみた。私は『姉』だから実際の所は分からぬけど……私と妹が違うのは確実だ。いや、ただの『性格』つて事もあるかもしれない。

その後に演奏された曲のうち、バッハの『カンタータ』『Hark! The Herald Angels Sing』後『アヴェ・マリア』は分かつた。

そしてその他に、贊美歌がいくつか演奏された。どれも初めて聞くものばかりで、私はとても新鮮に感じた。

昔は楽器が無くて、人の声を楽器として歌い神を讃えていた……つて、何かで読んだ事がある。そのせいなのか知らないけれど、曲は緩やかで響く音は美しい。神への信仰を表現する曲は、やはり美しくなければならないのだう。

だけど私は、その音をどこか切ないと感じた。決して豊かではなかった当時の人々の、神への切なる訴えなのか? それとも、神の加護を感じない日々への嘆きか? 美しいだけではやり切れない、

そんな部分があるのかなって、私は勝手に考えてみた。

もちろん日本人である私には、そもそも贊美歌というものの自体に馴染みがない。神の存在を信じている訳でもない。私の生活の中には、縋る神も、頼る神もそんなものは、初めから存在していない。だから、余計に切なく感じるのかもしれない。

……なんて、何でこんなに真剣に考えてるんだろう？　今の日本の神様なんて、祭りの方便みたいなものなのにな。

見える部分だけを信じていると騙される

演奏会が終わり、ドアに掛けた札を『Close』に返した後も、常連達は当たり前のように残り雑談に花を咲かせていた。もちろん私達もその中に含まれている。

これからが面白いんだから、早く帰ってしまうなんて、もったいない真似が出来るかつての。

誰か優しい人が差し入れてくれたオードブルのプレートが並び、これまた誰かが持参したアルコール類も加わり、現在はちょっとした宴会状態に発展している。

もちろん話題の中心はさつきまでの演奏会。けど、日頃から仲の良い中年達にとって、若い一人は格好の餌食だ。

「美人さん捕まえて、しかもピアノが上手ときた。文紘くんもなかなかやるねえ。」

「当然！ 自慢の彼女だよ？ 何せ一日惚れだからね。」

おじさん達のからかいに、はつきり惚氣る文紘さん。しかし、美智留さんはそういう訳にもいかないようで、少し困った顔をする。

「自慢されても、私ただの学生よ？」

「いいのいいの、俺は美智留にベタ惚れだから。」

「ちょ、そんな事、こんな所で言わないでよー。」

「ねえ、将来はピアニスト？」

「あ、はい、そう成れればいいんですけど……どうでしょっ？」

どこからかの質問に、彼女は答える。おじさん達に取り囲まれて、今夜の主役は大変そうだ。

「美智留なら大丈夫！」

「文紘の大丈夫は、根拠が無い！」

「酷つ！？ 僕は信じているのに。」

そしてまた、漫才のよつた掛け合いが始まった。文絵さんは終始楽しそうで、美智留さんは……そもそも突っ込みの体质なんだろうな。

そして、珍しいのは美智留さんだけじゃなくて、葵だって初顔で、しかもこちらも相当の美人さんだからね……おじさん達が放つて置くはずも無い。

「美晴ちゃんの友達だつて？」

「今日は美人がいっぱい、嬉しいねえ。」

助けを求める視線を何度も感じたけど……頑張れ、葵！　私は私で楽しくやつてるからさ。

母はカメラを首に提げたまま、楽しそうに会話に興じている。妹の方はその傍で……やっぱり食べる事に夢中のようだ。母の所に行つてから、もう一つショートケーキを注文し、おまけに母のチーズケーキの半分も、あの子が食べる姿を見たんだけどな……。

気が付けば文絵さんは輪から離れ、一人レコード傍の壁にもたれていた。壁の花？　つて、言いたい所だけど、どうやら相当お疲れらしい。

「お疲れ様です、文絵さん。」

「あれ？　美晴ちゃんは捕まらないんだね？」

「私は珍しく無いもので、気楽にしてますよ。」

彼の傍に行き初めて気付いた事がある。レコードが回っていた。店内は騒がしいから全然気付かなかつたけど、控えめな音でパイプオルガンが鳴っている。それは知らない曲だけど、たぶんクリスマスの選曲……つて事なんだろうな。

「これ何で曲ですか？」

「ああ、これ？　とりあえずバッハの曲。何でいうのかは俺も知ら

ない。けど、雰囲気あるでしょ？」

彼は壁にもたれたままニーッと笑い。さつきまでの疲れた顔は、完全に消えてしまった。

「そうですね、さつきまで聞こえてませんでしたけど。」

「そつか、でもBGMってのはそのくらいでいいんだよ、たぶん。」
彼がそんな事を当然のように言つものだから、私はつい一言いいたくなつた。言つていいのか悪いのか、本当はよく分からぬけど……そんなに頑張り過ぎるのは、たぶん良くないって、そう感じたからだ。

「そんなになるまで気を使わなくつてもいいんじゃないですか？」
「無理。俺はそういう性分なの。」

くらへらと笑いながらの返事に……だからそうなるんだろうなつて、私は笑い返せない。

「潰れないで下さいよ。」

「大丈夫。」

「文紘さんの『大丈夫は根拠が無い』って言われてませんでしたつけ?」

「……本当に大丈夫だつて、今回は根拠あるし。」

「どんな根拠ですか?」

だが私は、軽々しく聞き返した事を、すぐに後悔する事になる。
「後で美智留に癒してもらうから……それを思えば、こんなのが全然問題無い。」

その言葉の意味を一瞬考え、辿り着いた答えに赤面する。

「美晴ちゃん、赤いよ?」

「あと、ええっと……アダルトの方面には免疫がないので、これ以上は突つ込みません。」

「あれ? ひょっとして、美晴ちゃんの弱点を発見。って事かな?」「その点に関しては、それでいいです!」

「変だな、美晴ちゃんにしては、諦めが良すぎない?」

「だつて、本当に駄目なんです！…」

「じゃあ、からかつてもいい？」

「……止めて下さー。」

「この人、想像以上にいい性格をしている。彼の本質を見られたのは良いんだけど、こんな意地悪な人に弱味を握られてしまったのは、歓迎出来ない。」

「そういうば、ピアノはどこから持つて来たんですか？　あれ、結構古い物ですよね？」

「だから、こんな時には話を変えるに限る！」

「ああ、あれ？　あのピアノはね、じいちゃんの友人から譲つてもらつたんだ。昔は娘さんが使つてた物らしいんだけど、もう誰も弾かないし、家で埃を被つてるより誰かに使つてもらつた方が、ピアノも喜ぶだろ？ってわ……逆に喜ばれたんだって。」

「なるほど。」

やつぱり大事にされてたんだなと、私はジッとピアノを眺めた。それは賑やかな輪の向こう側で、溶け込むようにそっと佇んでいる。古い店も、古いピアノも、時間を経た物同士とても相性が良いのかれない。

確かに気になっていた事だけど、ただ逃げるために振った話で、こんなにジンとさせられるとは思わなかつた。

「小原さんつていうおばあちゃんなんだけどさ、本当なら聴かせてあげたいんだけど……でも、入院してるからさ。」

あ、知つてゐる。優しい雰囲気の品の良さそうなおばあちゃんだ。カウンターじゃなくて、確か窓際の席が指定席だつた。

「マスターがお見舞いに行つて、いなかつた時ですか？」

「うん、よく覚えてたね。」

「もちろんですよ。マスターがいないのつて初めてだつたから。でも、元気になつたら、聞いてもらいたいですね。」

「…………うん、だよね。」

だけど、彼の返事は歯切れが悪い。気遣うように微笑む姿に、そのおばあちゃんはもう長くないのかもしれないと感じ口を閉ざした。こんな時は、やっぱり何て言つたら良いのかよく分からぬ。

……私はたぶん、まだ後悔している。

向こうでは本職のカメラマンによる撮影会が始まっている。ほろ酔い加減の楽しそうな人達に、カメラを向ける母も楽しそうだ。まったく、仕事場でも写真撮つて来てるのに、終わつてからこの調子だ。いつもいつもカメラを持つて……本当に、どれだけ写真が好きなんだろ？

しばらく一人で会話も無く、賑やかな人達を眺めていた。だけど、文紘さんが不意にさつきの続きをし始める。

「調律は頼んだけど、修理まではしないんだ。……大事にされたんだろうな。」

「大事に使つていかないと、顔向けできなくなりますよね。」

「そうだよね。責任重大なんだよなー。」

「やつぱりここ、継ぐつもりなんですか？」

溜息まじりで笑つている彼に、ついでに一番聞きたかった事も聞いてみた。彼がこの店で働き始めた理由。集客に尽力する理由。そして今日、ぐつたりするほどテンションが高い理由。それはすべて、こういう意味なんだという気がしていた。

「無くなつたら、皆寂しがるでしょ？ それにね、俺もここ好きなんだ、」

そう当然のように言つ彼に、私は思わず笑つてしまつた。嬉しかつた。その心遣いと、彼もここが好きだつて言つてくれた事が。今騒いでいる人は皆、ここが無くなれば絶対寂しい。もちろん私だって。この店はもう、そういう当たり前の場所なのだから。

サービス精神に溢れるこの人は、BGMにならうとしているのか

もしれない。って、何となく思つた。

当たり前存在し、無ければどこか寂しく感じる音楽のよう。でも、目立ち過ぎず、そつとそこにある存在に。マスターなんかその通りの人だ。

でも、そう簡単な事じゃ無いんだろうな。覚悟と責任、その大きなプレッシャーに負けないよう、まだ気負つてしまつから、さつきのようになるんだろう。

だけど、人に喜んでもらおうとする、その精神に天晴れだ。

「本当にいい人ですね、文紘さんは。」

「美晴ちゃん？ それは、男に対する褒め言葉じゃないよ？」

「私は褒めてるつもりだから良いんです。」

複雑そうな表情の彼に、私はきっぱりと言い切つた。だって、本当に感心してるんだからさ。

「なんかペラペラ話しちゃつて……格好悪いな、俺。」

溜息混じりに言う彼に、私は自然と顔がほこりぶ。

「私もこんなに訊けるとは思いませんでした。でも、本当に優しい人だつて分かつて嬉しくなりましたよ？」

「えー、今頃気付いたの？」

「はい、今頃です。ノリの良い人だとは思つてたんですけどね。文紘さんは、話術が巧みな分、警戒しちゃうんですよ。それ、どこかで習つたんですか？」

「ひどつ、でもたぶんバイトで身についたんだよね。」

「執事ですか？」

「うん。」

「一人ともそんな所にいないで、こっちにおいで。」

「そうよ、皆で記念写真撮れないじゃない。」

マスターと母が呼んでいる。記念写真？ って、そつ思つたけど、手を上げではいはい、行きますつて返事をした。

「私はこの店、これからも応援しますよ。」

「うん、よひしへ。」

「だから、メイド姿までは言わないけど、執事姿をいつか見せて下さいね。」

「うーん……それはどうだらう?」

なるほど。どうやら彼の言葉は、そのまま信じてほいかないうだ。

もつ少し話をして帰るといつ母と、母と一緒に居るといつ妹を置いて、葵と一人で家路に着く。まだ10時にはなっていないので、住宅街の外灯の下を歩くのは一人しかいない。

「でも、あんな関係つていいなあ。」

店でおじさん達に囲まれた時、放つておいたのを責められた後、唐突に葵が言つ。

「何が?」

「文紘さんと美智瑠わん。」

「ああ、うん、確かに良い関係だとは思つたけど。」

恋愛小説爱好者家の彼女とは、多少思つてている事が違うとは思つけど、確かにそれは否定しない。

「お互いを見る目から信頼の絆が感じられて、いいなあって。」

羨望の溜息を零しながら、視線を上げる彼女につられて、私も夜空を眺めてみた。その空には、もうほんの少し円に足りない、白い月が浮いている。

「そうだね。」

「ちょっと羨ましいな。って、思つちゃった。」

恥ずかしそうに言う彼女を見ると、『聰太くん、本当にしつか

りしようよ?』って、改めてそう思つ。たつた一言で済む事なのに、いつまでそんな状態で待たせるのだろう? そして、別にずっと待つてなくつたつて、葵から言つたつて良いのに。とも思つ。

「……葵もさ、早くそういう関係になれば良いんだよ。」

そうすればたぶん、全部きれいに丸く収まる。二人は幸せ、理佐ちゃんも安心、周りだって気兼ねが無くなる。

「そうよね。ねえ美晴、お互い良い相手に出会えればいいね!」

その言葉に私は驚かされた。今まで私が信じていた事が、すべて崩れ去ったと言つても過言では無いほどの衝撃だ。

……はい? ちょっと待つて、良い相手つて、何それ? 葵は聰太くんなんじやないの?? それに、私の事はどうでもいい。とにかく彼女からは、誰かを思い描いてるような素振りが見えず、おまけに「どんな人がいいかな?」って、夢見る少女全開の様子でにはしゃいでいる。

……まさか葵つて、聰太くんを好きな事に気付いてない????
いや、実は他に意味を含んでいるとか????

彼女の笑みは晴れやかで、本当に腹が立つほどにとてもキレイだ。
だけどその表情からは、さっぱり何も分からない。

……聰太くん? あんまりボヤボヤしてると、違う人に葵を攫つて行かれちゃうかもしないよ?

「いつはここに住んでいるのか？」

史稀にモデルをやらないか？ と、言われてから、何もないまま1ヶ月は過ぎた。その間に開いた写真の即売会は、大いに盛況で大満足だ。

被写体の聰太くんは、まだ中学生ながら素晴らしい。元々のファンの同じ中学の卒業生に加え、口コミやこの写真で彼を知った後発的なファンもいる。

元々は「冗談で撮つてた彼の写真。だけどそれを知つた彼のファンの子達が、是非欲しいと騒ぎ出した……のが、こんな事を始めたきっかけだ。そして男子からは、葵の写真を頼まれた。

まあ、双方と付き合いのある私にしてみれば、それはそんなに難しい事じやない。でも、一人には内緒にしてる。一人とも絶対怒るし。

今回は、スペシャルな写真を用意していた事もあり、売り上げは特別良かつた。

京都への修学旅行で、母の伝を利用して撮つた、葵太夫のコスプレ写真。もちろん安っぽい衣装じゃなくて、向こうで借りた本物の着物。赤と黒と金の豪奢な着物に、簪だらけの頭。メイクもばっちり施され、本人ノリノリで写した写真は、現像して持つてつた分だけじや足りなくて、予約待ちにまで発展した。

さすが美男美女、二人の人気はスゴイねえ。けど、今度何かを奢つた方が良さそうだ。

……まあ、あの太夫の写真を撮つた時は、私まで太夫の格好をさせられてしまつたんだよね。『誰かがポスターのモデルをやってくれるなら格安で』って、事だつたのに、見事に母にハメられた。実際にはもう一つ条件があつて『私もモデルをやるよ』って、そんなの全然聞いてないから！

一杯食わされたのは悔しいけど……でも、良い経験にはなったさ、きっと。それに、その写真は仕舞い込んで、ちゃんと封印したからもう平気。

そんなこんなで、学校は冬休みに入り、年も明け、再び学校が始まってしまったっていうのに、史稀とは全然出会わなかつた。だからもちろん、モデルに誘われるなんて事は不可能で……でも実は、あの誘いは気まぐれで、結局無かつた事になつたのかな？つて、いいかげん諦めかけてきた頃になつて、久しぶりに彼と出くわした。

学校の帰りの夕方に、最初に出会つたマンションの一階ロビー……そう、そこはもちろん私が住んでいるマンションなんだけじや。とにかく中に入つたら、もう一枚あるガラス扉の向こう側に、黒い「一」の史稀が立つて驚いた。

扉の開く音に振り向いた彼は、私に目を留めるとすぐに歩み寄り、暗証番号を入れなくとも自動ドアは勝手に開いた。そして彼は予想だにしない事を言つてくれる。

「お前の絵描いたから、ちょっと見に来い。」

「はあっ！？」

……描いたつて何？ モデルつて言つてたくせに、私は全然必要無いのか？？？

「何で描けるの！？」

「いいから来い。」

やつぱりこいつは分からない。そして彼は、私が本当について行くかも確認せずに、自分のペースで歩き出す。もう何？ 何でそんなに勝手かな！？ そうは思うけど、もちろん私はついて行く。だって行かなきゃ見れないんでしょう？ 私はそういう性格だからね。

ただ、さすがに彼の向かう方向はおかしい。

「ねえ、ちょっと、どこ行くの？」

彼が向かうのは、マンションの外ではなく中だ。ついて来いって言つたくせに、一体どこに行こうと言つんだろ？

「俺の部屋。」

「部屋つて……史稀、ここに住んでんの？」

「ああ。」

確かにマンションの入り口、しかもオートロックの内側にいたけどさ……だけ、ここに住んでるなんて、まったく思いもしなかつた。だつて8年くらいここに住んでるけど、今まで会つた事無かつたし。

最初にロビーで会つた以外は、全部外で見かけていたせいか……いや、そもそもどんなとこに住んでるのかなんて、まったく考えもしなかつた。

正直な話、彼がどんなとこに住んでるかなんてどうでも良かつた。ただ、あの無頓着な頭やヒゲ、夕方の半端な時間に見かける事を考へると、碌な生活はしてないんじゃないかつて気はしてた。

だけどこいつ良いコート着てるんだよな。前を行く彼の背中は、触り心地の良さそうな生地で、縫い目もキレイだ。本当に良い物のように見えるんだよな。以前掴んだグレーのコートを思い出しても、手触りはとても滑らかだった。

私の知つている事だけでは、まだイメージを合わせてバランスが悪い。まったく史稀は謎だらけだ。

彼はエレベーターの前を素通りし、迷う事なく階段に向かう。

「ほり、じっち。」

ようやく彼が足を止め、そう言いながら振り返つたのは6階まで上がつた時だつた。この時の私は息が上がり、足は棒。明日の筋肉痛を覚悟するほど的情けない有様だ。

……だけどこれは、さすがに言い訳がしたい。自分のペースで上がつて行くのなら、6階くらい何でもない。だけど、一段飛ばしで上つて行く大の男の後を追うなんて事は、もう絶対にやりたくない

！ しかもこいつ、何かスポーツでもやつてるのが、身のこなしが
やけに軽い。

だけどさ、先導するなら後ろをついてくる者の事を考えてくれ……
自分と、帰宅部女子高生の体力と一緒にしないで欲しい。……つて、
ここうちの真下なんじゃないか？

彼に連れて行かれた扉の場所は、7階に住む私達の本当に真下の
部屋だった。ちなみに、表札のプレートには、何故か名前が入って
いない。

彼が鍵を開け、扉を開けると少し甘いオイルのような匂いがした。
人の家つてのはどこだって、馴染みのない匂いがするもんだけど、
こここの匂いは普通じゃない。

つい勢いとか好奇心で、ここまでついて来てしまったけど、いざ
実際に入るとなると、やっぱりかなり抵抗がある。自分で言うのも
なんだけど、年頃の若い娘が、そんなに簡単に男の家に入つて良い
ものなんだろ？

そう寸前で一応躊躇したものの……私の性格は好奇心に抗えない。

「お邪魔します。」

だつて、モテルも抜きでどんな絵が描けるのかつて……ほら、と
ても気になるしさ。うん、ちょっと見ただけだから。

そう自分に言い訳しつつ、結局は中へと入つてしまつた。

この部屋の間取りは、たぶんうちと変わらない。うん、当然なん
だけど。きょろきょろしながら廊下を進み、まず思ったのは『本
当にここに住んでるのか？』って事だ。何と言つか……生活感が希
薄な気がする。

このマンション自体、ファミリーを想定した分譲物件……の、は
ずなんだけど、ここにはその家族の気配が一切無い。

玄関から扉が開いてた部屋を覗いてみたけど、置かれてるベッド
には、使われてる感じがない。あのキレイにベッドメイクされた
状態は、家というよりホテルのようだ。

それに細かなものが全然無い。下駄箱の上の写真だとか、些細なメモとか、インテリアの小物はもちろん、玄関マットすら無いし。

うちと同じ作りな分、余計に殺風景な印象がある。これならモデルルームの方が、よほど生活感があるんじゃないか？

こいつはたぶん一人暮らしだ。謎がいっぱいの人物だけど、それだけははっきりと確信出来る。

同じマンションの、しかもご近所さんだった事で、油断してたのは確かだけど……でもこうなると、さすがに自分が浅はかだったと思わざるを得ない。

「おい、早く来いって。」

だけど彼は、私の躊躇などお構いなしに奥へと進む。そりや、彼にしてみれば自分の家だもんな。

……仕方ない。もうここまで来たんだから、ちゃんとその絵を見てやるやー。ああそうだ、もう私は腹を括るー！ それにどうせ、私が警戒し過ぎていいだけだ。彼のこの気遣いの無さこそが、私への関心の薄さを示しているようにも考えられる。

そうと決まれば行動だ。靴を脱いで上がり込み後を追う。そして一番奥の突き当たり、リビングから続く部屋の手前で史稀は待っていた。

そして、その顔には笑みが浮かんでいる。えーと、……何だろう？ どうして彼は機嫌が良さそうなんだ????

その珍しい彼の姿に、逆に私はまた不安な気持ちになってしまった。

「いつまでも元気でいるのか？」（後書き）

太夫の写真の話は、「写真」って題で書いたので、混ぜ込んでみたんですけど、

詳細を知りたい方は、あちらでどうぞ。

なんて事は、拙くて言えない…

今もまだまだだけど。

人は本当の事を言い当てられると腹が立つ

うちだとこの部屋は現像室の場所になる。だけここではアトリエとして使われているらしい。なるほど……この部屋に漂う匂いの正体は、油絵の具や洗筆用のオイルだったのか。そういえば、美術室で嗅いだ事があるかもしない。

ここは他の部屋と違い、かなり雑然としててホツとした。整然とし過ぎた場所というのは、何だか逆に落ち着かない。もし彼が、果然とそんな場所で生活出来るのだとしたら、私はきっともう、彼を捜す事は無いだろう。

その部屋の中央にはイーゼルが置かれ、その前に円椅子がある。見た事も無いのに何故か、私には彼がそこにいる姿を容易に想像する事が出来た。右側の、手を伸ばせば届く位置にあるテーブルには、たくさんの画材が置かれ、それも自然だ。左の壁にはキャンバスが詰め込まれたラックがある。部屋の入り口傍に置かれたソファには、タオルや脱いだ上着が乱雑に置かれ、その前のセットになったテーブルには、「ツップやパンの袋、ペットボトルが転がっている。

なるほど。外で何か眺めている時同様、彼は家でも集中する事がが多いらしい。要するに、『目的の事以外はどうでもいい』きっと彼にはそんな所があるんだろうな。と、私はそう判断した。

それにしても、これを見る限り、まともな食事をしているようには見えない。そして、家にいるほとんどの時間を、ここで過ごしているんだろう。……アトリエで生活つてのも、何か違う気はするけどさ。

「ほら、そこのイーゼルのやつだ。」

珍しい彼の様子に戸惑いながらも、私は指された場所を見た。イーゼルの上には確かに一枚のキャンバスが立てかけられている。が、そこに描かれているのは人物ではない。じゃあ何のかつて言うと、

それは荒れた野に建つ堅牢な城だ。そしてその楼閣から咲いた、可愛らしい一輪のオレンジがかつた黄色い花。

一見してキレイな絵ではあるんだけど、ダリやマグリットのようなシユルレアリストの雰囲気がある。きっと何か意図する所があるんだろうけど、私には分からぬ。って言つた、私の絵じやなかつたのか？？？

いくら寄つて眺めてみても、表したい事は分からない。もちろん絵だつて変わらない。完全にお手上げの状態で、振り返つて史稀を窺うが、彼は満足そうな笑みを浮かべていて面白くない。

「これがお前の絵。俺が見たお前の姿だ。」

「は？」

……本当に意味が分からぬ。もう一度穴が開くほど眺めてみると、彼の言う事はピンとこなかつた。

「まだ乾いてないから、触るなよ。」

絵に触れようとした矢先に注意が飛ぶ。そつか、だから家に呼んだ訳ね。その部分だけは納得出来た。

彼は私の傍まで来ると、絵を見ながら口を開いた。

「一見、人懐っこそうに見えるけど、実際にはそう心を開いちゃいない。傍若無人な振る舞いで人を煙に巻くのは、都合の良いようにコントロールしようとしてるんだろ？ 積極的に見えて、実の所は一步退いた場所で眺めてる。……そうやって距離を置く事で、弱い部分を隠してんだよな？ そのくせお前、相当お人好しだろ？ 根は凄く真面目で、責任感が強くて頑固だな。それに、あれこれ世話を焼いたりするのが好きだったり、お前そんな感じだろ？」

このひどく失礼な人物に、私はもちろん反論したかつた。……けど、そんな言葉は出て来ない。急に血の気が引く思いがして、全身が冷えていく。

「見ず知らずの俺に、こんだけ構つてんだからな。」

彼の笑う声は、冷えた心に突き刺さる。ゆっくりと、もう一度改

めて私は視線を絵に戻した。それだけ聞けば、この絵の意味が分かる気がした。

その黄色い花は、華奢で可愛らしい。これが私……私の人に見せないようしている部分なんだろう。堅牢で無骨な城壁で自身をよろい、必死にそれを隠している。だけど、ただ籠もつているだけではなくて、それでも人と関わりたくて、城から姿を覗かせている……つて所か。

人に弱味なんかを見せたくない。世話好きは否定出来ない。大袈裟に振舞う事も、人を都合良くコントロールしたいのも事実だ。

人の言葉を冗談だと取れなくて、融通が利かない所も、一人で全部やらないと気がすまない事も、今更人に指摘されなくたって、自分でしつかり分かつっている。

私が史稀を観察してたはずだったのに、逆に私も観察されていた……という事か。参ったな、私の日々の努力は、こんなに簡単に見破られるものだつたのか。

そう思うと、とても腹が立つ。それはもちろん彼ではない。自分自身に対してだ。まったく彼にはとても感謝だ。本当にいい勉強をさせてもらった。……私の努力はまだ足りないんだと。

でもその感謝を、素直に言葉で伝えるのには、まだ胸の内は複雑過ぎる。動搖と焦りと、彼に興味を示した事への後悔で、何を言つたらいいのかなんて、とてもじやないが考えられない。出来る事ならこここの場から、キレイさっぱり消えてしまいたいほどだ。

黙つていると、まだ彼は言つ。

「家の事、一人でそんなに無理する必要があるのか？ 意地張つて強がつてばつかだと、お前そのうち潰れるぞ？」

しかし私には、彼が何を言つているのか分からなかつた。

「何もかも、一人で背負い込む事は無いだろ？」

訳が分からず振り替えると、何故か史稀は優しい顔で私を見てい

た。無理？ 無理って何だ？ …… 無理なんて、私は別に……。

だけど、そう思う気持ちとは裏腹に、私の目頭は熱くなり涙が溢れる。そして、その事実に私は余計混乱した。

「ほら、少しばかり力を抜け。」

泣いてる顔なんか絶対に見られたくなくて、じつと俯いていると不意に頭を撫でられた。ゆっくりと、何度も何度も撫でられるのは。どこかじんわりとして、余計に涙が出る。

「お前は全部一人でやってしまうタイプなんだろうが、もう少し人を頼る事を覚えた方がいいんじゃないかな？」強がってまだ大丈夫って思い続けてると、段々逃げ道が無くなるんだ。

その声はとても優しい。けど、その優しさは腹立たしい。

家の事つて、こいつは一体私の何を知ってるんだ？ どうしてこんな事を言い出したんだ？ 憤りを覚えて体が震える。なのに……涙は止まらない。温かいものは徐々に溢れ、頬を伝つて下に落ちた。違う、無理なんかじゃない。強がつてなんかない……私は強いんだ！！

「……余計なお世話だ。」

「それはお前もだ。人が必死に悩んでるのに、邪魔しに来るから集中出来ない。おかげで、色んな決意が揺らぎそうになる。」

「……それは悪かったな。だけど、お前じゃない！ 私は美晴だ。いい加減覚えろっ！！」

乱暴に顔を拭つて、撫でる手を振り払う。そして彼を睨みつけた。余裕の無い自分が情けない、ハつ当たりする自分に腹が立つ。そして、こんなにも弱い自分はとても嫌いだ。

「おい、待て！」

静止の声なんか、もちろん無視して飛び出した。このままだと私は、もっとたくさんの情けない姿を、彼の前で晒してしまいかねない。足はだるいままだけど、再び階段を駆け上る。

今、ここでエレベーターを待つなんて嫌で……そもそも1階分の

ためだけに、わざわざ呼ぶのもポリシーに反する。

駆け上がったそのままの勢いで家に飛び込むと、勢いよく開けた扉は必要以上に大きな音を立てた。イライラしながら脱いだ靴も跳ね返つて壁に当たる。

「何！？ どしたの？ ねえ、おねえちゃん！？」

廊下の奥、リビング扉の隙間から、妹が顔を覗かせた。手にした洗濯物を取り落とし、慌てたようにこっちに来る。だけど私は返事もしない。こんな顔絶対見られてたまるか！ 急いで部屋に入ると荷物を投げ、背中で扉を押さえつけた。

「何でもない！ いいからあっしひ行って！」

最低だ。

扉越しの妹の声は慌てて、私を心配してくれている。だけど……私は一人になりたい。

妹の気配が無くなつてから、私はベッドに倒れ込んだ。布団を引き被つて、そして考える。

何なんだあいつは？ どうして見事に言い当てるんだ？ 私は邪魔ばつかしてたつてのに、何であんなに優しくするんだ！？ とにかく色々な事が悔しかつた…… そう、こんなにも悔しい思いをしたのは、たぶん生まれて初めてだ。

甘い物には癒されるけど甘いだけじゃ駄目なんだ

胃が痛くなりそうなので、悔しい思いをした翌日。学校が終わって一度家に帰つたものの、どうにも居心地が悪くて『Le sucクリエ』に逃げてきた。本當なら夕方にはやる事がたくさんあるんだけど、でも家にいるのは辛かつた。

理由は妹。チラチラと和歌奈が私の様子を窺つてくる。何も言っては来ないけど、その視線が気になつて、落ち着かなくて……でも、たとえ訊かれたとしても、昨日の事について話す気なんかまったく無い。だからあっさり逃げたんだ。

「こんにちわ。」

「いらっしゃい、美晴ちゃん。」

店に入ると、マスターはいつものように迎えてくれる。その笑顔を見ただけで、私は何だかホッとした気分になれる。客がないのをいい事に、窓側の席で油を売つてるっぽい文絵さんも、「いらっしゃい」と手を振つてくれたし。その前の席にいる美智留さんも、こちらに笑顔を向けてくれた。ここはとても暖かい。

カウンターの席に向かい、脱いだコートとマフラーをイスの背に掛ける。ここの人達も暖かいけど、店の中も暖かいからね。

「どうしたの？ 今日は少し元気が無いようだね？」

普段通りにしていたつもりだったのに、席に着くなりマスターに訊かれてしまつた……さすがですよ。こんなに簡単に見破られてしまつと、もう笑いたくなつてくる。いや、史稀にも隠せていないものが、マスター相手に隠せるなんて思うのが間違いなんだろう。

私はカウンターに頬杖をつき、ミルクセーキを作ってくれているマスターを眺めた。その手は昔から変わらないような気がしてたけど、よく見れば皺が増えたし染みもある。それだけの付き合いがあるって事か……マスターにしてみれば、私が生まれる前から知つて

るんだもんな。だから些細な違いにも、すぐ気が付いてくれたんだろう。たぶんそれは嬉しい事だ。素直じゃない分くすぐったさもあるけど、私の事を気に掛けてくれているんだと思うと、やつぱり嬉しい。

だからといって、詳しく話す気になれる訳じゃないけど、『何でもない』って拒絕もしたくない。自分のおじいちゃんくらいに思つてるマスターには、何となくそんな態度を取りたくない。だからほんの少しだけ吐き出させてもらう。

「昨日考え事し過ぎて、疲れちゃっただけ。」

分かった風な態度で、偉そうな事を考えていた自分が情けなくて、史稀に内側をあつさり見破られてた事が悔しくて、色々浮かれていた自分がとても恥ずかしかった。おかげで昨夜は、いつの間にか不貞寝だ。

でもその分いつもより早く目が覚めてくれたから、朝食や朝の準備に支障は無かつた……ものの、やっぱりいつもの朝とは違つていった。夕飯はカツブ麺でしのいだつて言つた妹は、変に気を使ってくれて文句も言わない。母はたぶん妹から聞いてるはずなのに、いつもと違う変わらなかつた。けど逆に、私の方が母と皿を合わせる事が出来なかつた。

「……そうかい。じゃあ、そんな時にはあれがいい。」

マスターは理由も聞かず、冷蔵庫を開け紙の白い袋を取り出した。

「これ貰い物なんだけど、美晴ちゃん食べててくれるかい？」

そう言つてミルクセーキと一緒に置かれたのは、粉砂糖で白く化粧されたパリパリの皮のシュークリームだつた。切り込みの入った生地の中にはカスタードクリームと生クリームの両方が詰められ、その上には半分のイチゴとブルーベリーが2つ載つている。それは見るからに美味しそうなんだけど……。

「いいの？」

「どうぞ。疲れた時には甘い物が一番だよ。それに僕はあんまり甘

いものは食べないんだ。」

「じゃあ、いただきます。」

田の前のショーケースと、マスターの笑顔につられて口角が上がる。一口齧り付くと、粉砂糖とクリームの甘さが、体にまで染み渡るような心地がした。

「食べ物つてのはね、そつやつて美味しく食べてくれる人に、食べてもらえる方がいいんだよ。置いておいても、どうせそのうち文絵の腹の中に消えたんだろうしな。」

マスターはそう笑う。けど、急に名前を出された当人からは抗議の声が上がる。

「何で突然俺が出てくんの！？」

「お前が来てから、物を貰う事が増えたからな。」

「だつてそれは、俺の魅力つてやつじゃないの？」

「馬鹿な事言わんでいい。客に出す店がその客から貰つてばかりでどうする？」

「んー、まあそつ言われると、そつなんだとじや。」

「だから、こいつやつて食べてもらえると助かるんだよ。な、美晴ちゃん。」

「うん、美味しいよ。」

一人のやり取りは新鮮だつた。私はマスターの優しいとこしか知らない。だから、文絵さんを窘める姿に、実は少し驚いた。

「そりや美味しいよ。それ『緑の庭』だからね。」

当然のように言つたその店は知らないけど、名前の方はどうかで聞いた事がある。いつだつけ？ と、記憶を探る。

「あ、クリスマスの時の？」

「そつ。よく覚えてたね。」

クリスマスコンサートの時も、その名を口にしたのは彼だつた。あの日だけのメニューのケーキを特注したつて言つてた店か。その時も彼は『美味しい』って褒めていた。ミルフィーユは確かに美味しかつたし、妹もとても美味しそうに食べていた。

「それ、どこにあるんですか？」

「港のとこの公園あるでしょ？ その近くの住宅街にひとつやつとあるんだ。ねえ、入ってた袋に地図があるかな？」

シュークリームの入っていた白い袋を、マスターが渡してくれたけど、残念ながらその地図では、シンプル過ぎてほつきりとした場所が分からぬ。ただ、理佐ちゃんの家からは近そだなって事だけは分かった。

妹に食べさせたら絶対喜ぶだろうなって。こんなお菓子食べてたら、どうしてもあの食いしん坊の事を思い出してしまつ。気遣ってくれたお礼と、心配かけたお詫びと。向より私は、美味しいうに食べててくれるあの姿が好きだから。

だから、後でこの店に行つてみよつと思つて、一緒に書いてある住所を控えておいた。

ミルクセーキは甘い。クリームも甘い。けど、甘いばかりじゃしつこくなる。イチゴやブルーベリーの酸っぱさは、きっと無くてはならないものだ。マスターはいつも優しい。でも、叱る事だってある。それはその理由があるからだ。

……当たり前じゃないか。何も優しくするだけが優しさって訳じやない。注意だって、忠告だって、聞こえる言葉は痛いけど。でも、その裏には優しさがある。

昨日の史稀はとても優しい顔をしてた。手もそして声も。だけど私は、その言葉を聞く耳を持つてなかつた。図星を指されて暴れただけだ。

……本当に情けないな、私は。

「美晴ちゃん？ 何か良い顔になつたね？」

「うん、ありがと。何かすつきりした。」

本当にマスターは鋭い。

「それは良かった。甘いものは効くだろ?」

「うん、そうだね。」

「何が?」

状況の分からぬ文紗さんが不思議そうな顔をするけど、それは言えない。子供みたいに拗ねてただけの恥ずかしい事を、わざわざ教えたりなんか出来ないからさ。

「ここはミルクセーキも、お店も甘くて優しいなって事ですよ。」

「店も甘いの? 確かに『Le sucre』ってシューガーポットつて意味だけど……甘い?」

「甘いんです。『今は体を表す』って言ひけど、それ本当だなって思つたんですよ。」

文紗さんは、全然納得のいかない顔してるけど、私的には満足だ。

会話も、精神的にもひと段落すると、見つめられている事に気付いた。その視線の主は、今までまったく会話に参加していなかつた美智留さん。あまりにじつと見られてるので、私は思わずタジタジになる。

「…………あの、何かついてますか?」

「あ、ううん、ごめんね。何かどつかで見た事ある格好だなって。何だ口にクリームが付いてるのかと思って、おしごりで拭いてみたけど、そういう訳じゃなかつたのか。」

「クリスマスには会いましたけど?」

「ううん、あの時も思つたんだけど、そのコートとマフラー見た事あるなって。クリスマスよりもっと前なんだけど……。」

イスに掛けてあるのは、濃いグレーのコートに深紅のマフラー。まあマフラーはよく目立つとは思うけど。コートの方はありふれている。ちなみに、マフラーは編み物がマイブームだった時期の妹が編んでくれた物だ。

「美智留、面識あつたの?」

「ううん、無かつたはずだけど……何か引っかかるのよね。」

文紘さんの質問には、私も同じく全否定だ。私が彼女に会ったのは、クリスマスの時が初めてだから。

「あ、そうだ。ねえ、表の通りにコンビニあるよね。その道の反対……信号渡らずに、男の人と結構長い事話してなかつた?」

「はい?」「

「相手は背の高い、無精ひげの人だつたけど。」

「それは史稀だ、間違いない。」

「あー、それなら覚えがありますね。」

絶対、絵のモデルをやらないかと誘われた日の事だ。それしか思い当たるような事は無い。

「偶然ね、コンビニの中から見てたのよ。何で渡らないのかなって不思議に思つてたの。その後、男の方はコンビニに来たから、ついジロジロ見ちゃつたんだけど。」

「はあ。」

「あの人彼氏?」

「違いますよ?」

何だか好奇心に満ちた目で見つめられたけど、私は普通に否定した。それにしても、そういう話は皆好きなんだな。少しそう呆れていると、更に文紘さんまで口を挟んでくる。

「じゃあどういう関係?」

だけどそれには、さつきのよつに即答出来ない事に気付き、私は言葉を詰まらせた。どうこう? そういえば、史稀との関係つて何なんだろう? 無論彼氏ではない。友人でもない。家は知ってるけど、本名は知らない。携帯の番号もメアドも知らない。会つのは偶然会つた時だけ。こういう関係は何て呼んだら良いんだろう?

「……えーと、知人?」

苦し紛れの答えはこれだ。

「そうなの?」「

「そうかなあ?」「

残念そうな文絵さんと、疑惑ありの美智留さん。意味はそれぞれ
だけど、二人の声が見事に重なつていて可笑しい。

「そうですよ。他に表現する言葉が無いんですよ。」

『知人』=知つてゐるだけの人

そつか。史稀と私の関係つてのは、結局そんな程度だったのか。
と、今初めて気付いた事実に驚き、私は何だか残念な気分になつた。

終わり良ければ全て良しひのは本当だと思ひ

絵を見せられてから一週間が過ぎ、私はある決意を持つて史稀の部屋の前にいた。手にはタッパーの入った紙袋。肩にはカメラを掛けている。いつも持ち歩いてるコンパクトなデジカメじゃなくて、母さんのお古のフィルムのやつだ。

史稀の言葉は痛かつたけど……だからこそ礼は返さなければならない。もちろん感謝はある。だけど『ありがと』って言葉が言えるほど、私の傷は浅くない。驚いた顔や、せめて困った顔くらいしてもらわないと、泣かされてしまった私に吊りあわない。だから、どうすれば史稀を驚かせる事が出来るだろう? と、結構長い事頭を悩ませたんだ。

そして今日、ここにいる。

私は何度も深呼吸を繰り返して気合を入れた。だけど、何だか変に緊張してしまう。たかが人の家のチャイムを押すくらい、どうって事無いはずだ。理由だってある。しかも出てくるのは史稀だつて分かってる。なのに何故か緊張は無くならない。

もう一度深呼吸をして、ようやくチャイムを押す。たつたこれだけの事なのに、私はとてもないほど勇気を要した。……変だな。なのに、いくら待つても返事は無い。だから、もう一度改めて押してみたけど、やっぱり返事は無い。扉に耳を当ててみたけど物音はしないし、もちろん玄関の扉も開かない。

……ひょっとして留守? 私、空振り? もちろん約束なんかしてる訳もなくて、向こうの都合は完全無視なんだから、いない事だつて当然見える……っていうか、本当にいなんじゃないけど。

かなり気を張っていた分、そのダメージは大きい。もう今にも膝

から崩れ落ちそうな気分で、私は手にしたペーパーバックの中身を見下した。

……これどうじょう? 置いて逃げるは……やっぱり駄目だな。冬とはいえ、通路に食べ物を放置しておくのは問題だらうし、何よりこれを見た史稀の反応が見られない。

彼を驚かせるために、せっかくお弁当作って持つて来たつてのに……どうしていいかな?

今日はいつもより早く夕飯の準備をして、しかもこのお弁当のために、いつもより多く作った。海苔を巻いたおむすびと、玉子焼きと、大根と人参と蓮根の煮物に、鳥モモ肉を焼いたやつ……と、ついでにエリンギも炒めた。

男の人はどうのくらい食べるのかよく分からないから、弁当箱じやなくて、このくらいかな? ってサイズのタッパーに、結構いっぱい詰めてみた。

……だって、彼の食生活はあまりにも酷かったからさ。それに『お人好し』で『世話を焼くのが好き』って言ってくれたんだもんね? それならとことん焼いてやろううじやないか! って、そう意気込んできたのにな。

……仕方ない、後でもう一度出直すか。

でも、私はこのやり場の無いモヤモヤを抱えたまま、家に帰る気にはなれなかつた。だから向きを変え、エレベーターに向かつ。肩のカメラを担ぎ直し、深呼吸をして気持ちを切り替えた。

折角こんなカメラを持つてゐるんだ。写真でも撮つて時間を潰そう。空や町並みの写真も良いけれど、こんな時には彼がいい。たぶん今的时间なら丁度帰つてる頃だらう……そうだな、公園辺りで張つてればいいかな?

第一公園から聰太くんを隠し撮りして、スッキリした気分で戻つてみると、珍しい車がマンショングループの来客用駐車場に停まっているのを見つけた。青い2ドアのBMW? こいつはスポーツカー系って、いくらくらいするものなんだろう? つて、何となく眺めていると、急にピッという音がして、黄色いランプまで光ったからびっくりした。よく考えればリモコンで開錠しただけなんだけど……突然だつたからや。

気まずい気分で少し離れた……けど、持ち主を待つてみた。電波が届くほどすぐそばにいるはずなんだし、どんな人なのかなって興味本位で見てみたかった。だって、私は庶民だからね。

もつ暗くて分かりにくいけど、敷地内の外灯の下をこちらに向かって歩いて来るのは女人だ。濃い色のスーツをピシッとして着こなす、ショートボブの女性。歩く姿は颯爽として、なるほどあんな車に乗つてる訳だと思われた。

でも彼女の後ろにもう一人いる。数歩離れてついて歩くのは、背の高い男性……つていうか史稀だよね、あれは？ 俄然興味は湧いたけど、もう少し身を隠せる場所を探して隠れた。何がどうって事も無いはずなんだけど、咄嗟にそう動いていた。

「じゃあね、ヨシアキまた来るわね。」

あ、史稀の名前分かつちやつた。これは思わぬ収穫だ。
それにしても投げキッスって……テンションの高い人だな。

「忙しいんなら、わざわざ来んな。」

でも、飛ばされた史稀の反応はあからさまに悪い。

の女性は一向は氣にする様子もない

「
三
ノ
久
留
川
」

「もう、ヨシアキってばつれないんだから。」

「あー、うるさい。

「うん、そうよ。構いたいんだもの。じゃあね。」

女性の笑い声が、閉まる窓に消えてゆき車は動き出す。車が角を曲がつて見えなくなる頃になつて、今までずっと不機嫌そつだつた史稀が呟いた。

「ありがとな。」

つて、もう何それ！？ 素直じゃない男だなこいつは…。

彼女がいるなら弁当なんか迷惑だらうし、こいつのまま帰ろうかな？ つて思つてたんだけど……そんな態度なら、あえて言つてやる。

私はこいつそり背後に回つて、カメラを構えた。そして、出来るだけ嫌味つたらしく言つてやつた。

「ヨシシアキくん、本人に聞こえるように言わないと、意味無いんだよー！？」

「つー？ ……お前、見てたのか！？」

おまけに、驚いてこちらを向く瞬間を狙つてシャッターを切る。さて、どんな表情が撮れてるか現像が楽しみだ。

「眩しいな！ 一体何の真似だ！？」

史稀……改め。ヨシシアキくんは、眉根が寄り不機嫌な表情を作るけど、私の口は弧を描く。

「んー？ ヨシシアキくんは、私をモデルにして絵を描いた訳だ。だから、私はあなたの写真を撮るの。」

「何で？」

「何でつて、これが私の表現方法だから。」

今のは、自信満々の顔をしているはずだ。嘘なんか一つも言つてない。

「あのね、うちの母親はカメラマンやってんの。だから、私も小さい頃から写真撮るの好きなんだ。」

「だからって、どうして？」

「だからね、写真であんたを暴いてやる！ グサグサと刺さるキツ

イ事ばつか、あれだけ言つてくれたんだもん……イーブンでしょ？
そう言つと彼は、とても嫌そうな顔したけど、仕方が無いなって、
最後にはそんな顔になっていた。

「……好きにしろ。」

「もちろん、好きにしますよ。」

「うんうん、なかなか潔い人物じゃないか。

「でもな……」

「何？」

勝つた！ つて私は喜んでたんだけど、まだ彼には言いたい事が
あるらしい。

「ミシアキくんは止めてくれ……。」

「じゃあ、さつきの人が誰かつて、教えてくれたら止めてあげる。」

「……お前、いい性格してるよな？」

「うん、もちろん。『傍若無人な振る舞いで人を煙に巻く』って、
分析してくれたんでしょ？」

「根に持つな？」

溜息を吐きながら歩き出した彼に、私は付きまといついで後ろを
歩く。

「当たり前だ。で、どうするのミシアキくん？」

「……姉だよ。」

エントランスに入る直前、大きく溜息をついてそう言つた。だから、そのまま真っ直ぐ入つて行こうとするのを捕まえて、紙袋を押し付けた。

「じゃあ史稀、これあげる。」

「何だよこれ？」

「んー？ 開けてからのお楽しみ？ ……つて、事にじとく。」

蓋を開けた彼が、どんな顔するのか気にはなるけど、それ以上の
収穫があつたから、まあいいや。

それに……考えてみたら、その後どうしたらいいか分かんなくな

つ
た
ん
だ
も
ん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9988x/>

不思議な人。

2011年11月26日18時46分発行